

【論文 13】

「仏を上首とするサンガ」と「仏弟子を上首とするサンガ」

森 章司

- 【0】はじめに 001
- 【1】‘pamukha’の意味 005
- 【2】パーリ聖典における「仏を上首とするサンガ」の用例と実態 011
- 【3】パーリ聖典における「仏弟子を上首とするサンガ」の用例と実態 029
- 【4】まとめ 044

【0】はじめに

【1】総合研究「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」は、本「モノグラフ」第1号に掲載した【論文1】「『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』の目的と方法論」に記したように、釈尊の生涯と釈尊教団の形成史を明らかにすることを目指したものである。このうちの「釈尊の生涯」は言うまでもなく、最終的にはできるだけ詳細に釈尊の伝記を執筆することであり、これについては紛れはないものと思われるが、もう一つの「釈尊教団の形成史」については多少の議論が必要であるかも知れない。なぜなら「釈尊教団」という言葉自体が、必ずしも一般的ではないからである。

ここでわれわれが「釈尊教団」というのは、釈尊在世中においては釈尊を中心に、インド各地に散らばっていた仏教の出家修行者（比丘・比丘尼）たちと、彼らによって形成される各地に散在する一つ一つのサンガを統括するような組織である。要するに「原始仏教教団」とか「初期仏教教団」という言葉は、どちらかといえばぼんやりと三宝に帰依する仏教徒が、観念的な紐帯によって結ばれている一体感のようなものを意味するのであるが、「釈尊教団」というのは「律蔵」の中に使われる「サンガ」という言葉を用いることができるような、全仏教徒あるいは各地に散在するすべてのサンガを統括する「組織的な集団」を指し示そうとしたものである。

ところが釈尊を中心として、当時のインド各地に散在していた仏教の出家修行者たちやサンガを統括するような組織的なサンガが、はたして存在したかどうかということ自体が問題である。仏教の教えを奉じている出家修行者たちが等しく仏教徒と呼ばれるためには、そのようなものが存在しなければならないはずなのであるが、しかしその確たる証拠を見つけることができないという事実もあって、もしそういうものが存在しなかったとすれば、「釈尊教団の形成史」というテーマも砂上の楼閣のように雲散霧消してしまいかねない。

しかしながら「釈尊教団」というものを、組織的な実体を有するものではなく、釈尊の教えと釈尊への信頼という精神的な紐帯で結ばれた観念的な集団をさすというふう理解すれば、そういうものは確実に存在したであろう。そして従来は、このような集団を指し示すものが「四方僧伽」ということばであると理解されてきた。ところが実はこれにも大きな問題があって、そもそも「四方僧伽」なる概念が存在したかどうかということ自体も問題なのである。

このように本研究が「釈尊教団の形成史」を明らかにするとうたっても、その「釈尊教団」の存在そのものが問題となれば、その「形成史」なるものは何の意味ももたないということにもなりうるわけである。

実は、「釈尊教団」に関する上記のような問題について、筆者はすでに結論を得て、二つの論文を書いた。それは「釈尊のサンガは存在したか——『現前サンガと四方サンガ』序説——」（福田亮成博士の古稀記念特集号として発行された『智山学報』第56輯 福田亮成博士古稀記念号 平成19年3月）と、「『現前サンガ』と『四方サンガ』」（『東洋学論叢』第32号 東洋大学文学部 平成19年3月）という論文である。

これら二つの論文は、そもそもはこの総合研究から生まれたものであって、さまざまな事情によって他の機関の機関誌に発表することになったが、この【論文13】と、次の【論文14】と同様に、「釈尊教団は存在したか」「もし存在したとすればそれはどういうものであったか」という共通の主題を追及したものであって、本来は本「モノグラフ」に発表すべきものであった。しかしそれがかなわなくなったので、できるだけ本「モノグラフ」に自己完結性を持たせるために、先の二つの論文を読んでいただくかなくともおおよその内容がわかるように、まず少々詳しくこれら二つの論文の内容を紹介した後に、本論に入ることとしたい。

なおここでは、「釈尊のサンガは存在したか——『現前サンガと四方サンガ』序説——」を「第1論文」、「『現前サンガ』と『四方サンガ』」を「第2論文」と略称することにする。

[2] 第1論文は、ここにいう「釈尊教団」（「第1論文」ならびに、本「モノグラフ」に掲載した次の【論文14】のいう「釈尊のサンガ」）なるものが存在しなかったとすると、いろいろな面において不都合を生じるということを指摘したものである（以下には「釈尊のサンガ」を用いる）。

第1は、提婆達多が釈尊に「比丘サンガを自分に付嘱してください（*mama bhikkhusaṃghaṃ nissajjatu*）、自分が比丘サンガを pariharati（指導）しましょう（*ahaṃ bhikkhusaṃghaṃ pariharissāmi*）」と要求したサンガは、ここにいう「釈尊のサンガ」のようなものでなければならぬであろうし、阿難の釈尊が病気をされた後で、「世尊が比丘サンガに関して何かを語られない間は般涅槃されることはないだろうと考えて、心安らかになりました」と語ったサンガもここでいう「釈尊のサンガ」のようなものでなければならぬであろうということである。もしそれが観念的なものであったとしたら、「付嘱して下さい」という言葉もないであろうし、そもそもこれを「破僧」とはいわないであろう。「破僧」とは実体のある組織的な集団を分裂させることであろうからである。論文では、しかるに釈尊にはここにいう「釈尊のサンガ」のようなものを *pariharati*（指導）しているというような意識はなかったように見えるのが不思議である、ということを指摘した。もっとも本【論文13】で取り上げる「仏を上首とするサンガ」は明らかに存在し、これについては釈尊も *pariharati* するという自覚を持っておられたことは明らかであり、そういう意味では「釈尊のサンガ」にも1,000人とか1,250人の比丘たちから構成される「個別的な釈尊のサンガ」と、地上に存在するすべての仏教の出家修行者と、時間的には未来に存在するであろう出家修行者も含んだ「普遍的な釈尊のサンガ」の2種類がありうるということが予想され、提婆達多や

阿難が考えていたサンガは、後者のような釈尊のサンガであったと考えられるに拘わらず、釈尊自身にはその認識がないようであるので、「第1論文」ではその存在の有無に関する問題提起を行ったのである。

第2は、白四羯磨による授具足戒を執り行ってサンガへの入団を認め、比丘あるいは比丘尼の資格を付与したり、あるいは波羅夷罪によって比丘あるいは比丘尼の資格を剥奪してサンガを追放したりするのは、手続きとしては10人もしくは5人以上の、あるいは4人以上の比丘あるいは比丘尼からなる個々のサンガの羯磨として行うのであるが、しかしそれがここにいる「釈尊のサンガ」のようなものへの入団あるいは追放として、実効性のあるものでなければ、Aサンガにおいて入団を許された比丘がB・Cサンガにおいては比丘と認められないということになるし、Aサンガによって追放された比丘がB・Cサンガにおいては比丘たる資格を保持し続けるという不都合を生じることになる。しかもこれは比丘あるいは比丘尼としてのさまざまな権利や義務が伴うことであるから、決して観念的なレベルにとどまらない。要するに現実に行う手続きは個々のサンガが行うに拘わらず、その効果の及ぶ範囲はとしては、もっと普遍的な「釈尊のサンガ」のようなものでなければならないということである。このように比丘・比丘尼としてのもっとも基本的ないわば法律行為は、釈尊のサンガのようなすべての出家修行者ないしはすべてのサンガを含む範囲において実効性がなければならないはずであるのに、このようなものが存在したという具体的な証拠がないという問題を指摘した。

第3は先に触れた「破僧」であって、後世においては「破僧」には「破羯磨僧」と「破僧輪僧」の2種類があるとされるのであるが、提婆達多の破僧は釈尊教団を分裂させ、それを奪おうとしたものであって、「破僧輪僧」であることは疑いがない。それにもかかわらず提婆達多の破僧を主題とする「破僧毘度」では、その破僧が王舎城の舍利弗・目連が指導していた個々のサンガレベルの分裂のように描かれていて、釈尊のサンガのようなものを破るようには描かれていないという問題を指摘した。

第4は、第1結集であって、これは釈尊の遺教をまとめるという作業であるから、これもここでいう「釈尊のサンガ」のレベルの作業でなければならないはずであるが、しかし現実的に摩訶迦葉がリーダーとなって執行した結集は、500人の比丘からなるサンガの羯磨として行われたという不思議を指摘したものである。

このように「第1論文」は、上記の様な矛盾や不都合などを通じて、状況判断的には「釈尊のサンガ」は存在しなければならないはずであるが、「律蔵」に規定され、原始聖典に描かれるサンガは個々のサンガであって、「釈尊のサンガ」のようなものが存在したという確証を探しだすことは難しい、これをどう解釈すればよいのであろうかという問題提起を行ったのである。

[3] 「第2論文」は、観念的なものとはされていたけれども、「四方サンガ」という言葉が地上に存在するすべての仏弟子たちを統合する「釈尊のサンガ」のようなものをさすと理解されてきたので、これをその対概念として捉えられている「現前サンガ」とともに再検証してみたものである。

その結論を端的に要約すれば、厳密には「現前サンガ」の原語とされる

‘sammukhibhūta-saṃgha’ という熟語も、「四方サンガ」の原語とされる ‘cātuddisa-saṃgha’ という熟語も、パーリの原始聖典やアッタカターには存在せず、したがって従来考えられてきたような「現前サンガ」という概念も、「四方サンガ」という概念も存在しない、ということである。

そして従来は「現前サンガ」は個々のサンガ、「四方サンガ」は時間的にも空間的にも未来や四方に拡大するサンガであって、したがって「サンガ」の意味には2種類があると考えられてきたのであるが、原始聖典において用いられ、「現前サンガ」「四方サンガ」と呼ばれてきた言葉の中に含まれる ‘saṃgha’ は、一つの界 (sīmā) に住している4人以上の比丘あるいは比丘尼たちすべてが出席し（委任を与えるべきものは委任を与えて）、何らかの羯磨を行いうる条件にある集団をいうのであって、律蔵におけるサンガには二種類の概念は存在しないということ述べた。

具体的にいえば、いわゆる「現前サンガ」と呼ばれてきたものは、その集団が今まさに羯磨を行っている状態をいい、いわゆる「四方サンガ」と呼ばれてきたものは、旧住の比丘・比丘尼からなる日常の構成員のほかに、四方からやって来た比丘あるいは比丘尼が加わって、羯磨を行える条件を具えている、あるいは具える可能性のある集団をいうのである。そして後者のようなサンガが予想されなければならないのは、遊行というものが出家修行者に課せられた重要な修行徳目であって、そのためには園林や建物などの寺院の固定資産が、通常その地域で生活している旧住の比丘・比丘尼のみに独占されるのではなく、四方からやって来る客来の比丘・比丘尼にも開放されて、いつでも自由に利用できる権利が保証されていなければならないからである。要するに「四方」という言葉は、「四方に拡大する」という意味ではなく、「四方からここにやって来、またやって来るであろう」という意味であって、サンガはこの園林や精舎がある、限定された「界」にしか成立しえないということである。

このように今まで理解されてきたような、いわゆる「四方サンガ」と呼ばれてきた概念そのものが存在しないということになるが、その結論がそのまま、いかなる意味でも「釈尊のサンガ」なるものが存在しなかったということの意味することにはならない。なぜなら「第1論文」で指摘したように、「釈尊のサンガ」なるものが存在しなければならない状況証拠は、依然としてそのまま残されるからである。

[4] 以上のような研究の経過をたどってみると、ますます「釈尊のサンガ」なるものの存在を証明することができにくくなっているのであるが、パーリの原始仏教聖典には、「仏を上首とする比丘サンガ (Buddhapamukha bhikkhusaṃgha)」という言葉が多数見いだされる。あるいはこれがここでいう「釈尊のサンガ」をさすかとも思われるので、本論文が用意されたわけであるが、結論を先に言えば、これも「釈尊のサンガ」を意味するものではない。それほど多くはないが例えば「舍利弗と目連を上首とするサンガ」というような言葉も存し、またそういうサンガが存在しなければ、「律蔵」に規定される羯磨の意味もないことになるからである。

要するに、基本的には「仏を上首とするサンガ」は「仏弟子を上首とするサンガ」と同列のサンガであって、仏典で表される人数は、500人とか1,250人などの大人数の比丘から形成される「大比丘サンガ」であるけれども、律蔵の規定から言えば、この「仏を上首とする

大比丘サンガ」は、4人以上の出家修行者から形成される普通の意味のサンガに相当するのであって、それ以外のものではない。「第1論文」において、「釈尊のサンガ」にも「個別的な釈尊のサンガ」と「普遍的な釈尊のサンガ」の2種類がありうることを示唆しておいたが、これは前者に相当することになる。

このように「仏を上首とするサンガ」はけっしてここにいう「釈尊のサンガ」を意味するものではないが、しかし「釈尊のサンガ」は存在するかという以前からのテーマを追及する順序として、本論文では「仏を上首とするサンガ」と「仏弟子を上首とするサンガ」がどのようなものであったかということを中心に資料を紹介したうえでその実態を明らかにしておこうというのが、本論の目的である。

### 【1】 ‘pamukha’ の意味

[0] これから論じようとする「仏を上首とするサンガ」と「仏弟子を上首とするサンガ」の「上首」にあたるパーリの原語は ‘pamukha’ であって、例えば「私は竹林園を仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhassa bhikkhusaṃghassa) 施します」というふうに使われる。また「仏弟子を上首とするサンガ」も基本的には同じであって、例えば「舍利弗と目連を上首とする比丘サンガは (SāriputtaMoggallānapamukho bhikkhusaṃgho) キターギリに行った」というふうに使われる。要するに ‘Buddha’ に相当する部分が仏弟子の名前に入れ替わって例えば ‘SāriputtaMoggallāna’ とされるのみであり、用法には全く相違がないということである。

ところで本論文では ‘pamukha’ に「上首」という訳語を与えているのであるが、この語をどのように理解するかによって、このサンガのあり方が理解されるということも考えられるので、まずはじめにこの意味を調査しておく必要があるであろう。

[1] 試みに手近にあるパーリ語辞書で、 ‘pamukha’ の項を引いてみると、次のように解説されている。

PTS のパーリ辞書は

pamukha ① (adj.) (pa+mukha cp.late Sk.pramukha) lit. “in front of the face”, fore-part, first, foremost, chief, prominent S.vol.1 234,235; Sn.791 ……

pamukha ② (nt.) (identical with pamukha ① lit. “in front of the face”, i.e.frontside, front) 1, eyebrow(?) only in phrase alāra° with thick eyebrows or lashes

とし、Childers のパーリ辞書は

pamukho (adj.) in front of, facing; first, chief, principal ……Neut. pamukhaṃ, a terrace before a house

とする。

また水野弘元『増補改訂パーリ語辞典』では、

pamukha a. [sk. pramukha] 首長の、上首とする cf. pāmokkha loc. pamukhe

前に、先頭に  
とされ、雲井昭善『パーリ語仏教辞典』では、

pamukha adj. nt. [pa-mukha, cp. skt. pramukha] 面前で (pa-mukha) → 面前、前面、上首の、～を首とする。pamukhe (loc.) は adv. として、又は prep. として、～の前で、～の前に。

とされている。

なおサンスクリット語の ‘pramukha’ については、

Macdonell は

pramukha a. having the face, turned towards (ac.) ; foremost, chief, principal: *gnly.* -○, having as the foremost =preceded or led by, and so forth; n. biginning (of a chapter) ; present time: lc. in front opposite(w.g.or -○):○-, before one's presence

梵和大辞典は、

pramukha 形 (業) の方へ面を向けた ; 最も前の、最初の、主要な、主な、卓越した、を最前者とした = (-°) に次いだまたは続いた、……等の ; 【漢訳】 首、上首、元首、将領

Monier Williams は

pramukha *mfn.* turning the face towards, facing (acc.) , R.; first, foremost, chief, principal, most excellent, Hit.; (generally ifc.; f. ā) having as foremost or chief, headed or preceded by, accompanied by with

とされている。

‘mukha’ は「口」とか「鼻」あるいは「顔」「面」を意味し、それが「入り口」あるいは「門」という意に用いられることもある語である。またパーリ語の ‘pa’、サンスクリット語の ‘pra’ は「前に」「先に」という意を表す前接辞である。したがって ‘pamukha’ ‘pramukha’ の語義としては「顔の前面」「入り口の前面」を意味し、抽象的に「初めとして」「先頭に」を表しもするのであるが、ここに指導者というニュアンスが含まれると、『梵和大辞典』が表すように、「首」「上首」「元首」「将領」などの漢語が当てられるようになる。したがって後者のような意味に使われる場合は、仏典に多いということがわかる。

[2] そこで次に、手近にあるパーリ聖典からの日本語の訳語を調査してみると、次のようになる。なお ‘bhikkhusaṃgha’ にあたる部分もさまざまに訳されている。実はこれも重要な議論の対象としなければならないのであるが、訳者たちはそれほど厳密にこの語をとらえていなかったということもわかるので、併せて紹介しておく。この ‘bhikkhusaṃgha’ の相当する部分の訳語には「 」を付しておいた。なお出典は PTS の巻・ページと、その和訳語が見いだされる著書の著者・書名・出版社と巻数・ページである。

また ‘Buddha’ の訳語にもさまざまなヴァリエーションがあるが、これはここでの議論には関係がないから、すべて「仏」に統一した。

[2-1] 「上首」と訳するもの

仏を上首とする「比丘衆」 : Vinaya 「大犍度」 (vol. I p.038 他) = 渡辺照宏訳『南

伝』3 p.070 他、*Vinaya* 「臥座具捷度」(vol. II p.147) = 宮本正尊・渡辺照宏訳『南伝』4 p.226、*Vinaya Pārājika 001* (vol. III p.011) = 上田天瑞訳『南伝』3 p.017、*MN.091 Brahmāyu-s.* (梵摩經 vol. II p.146) = 青原慶哉訳『南伝』11上 p.193、*Jātaka 213 Bharu-j.* (vol. II p.170) = 高田修訳『南伝』30 p.289、*Jātaka 409 Daḷhadhamma-j.* (vol. III p.384) = 立花俊道訳『南伝』32 p.374

仏を上首とする「比丘衆団」：*Jātaka 044 Makasa-j.* (vol. I p.247) = 山本快龍訳『南伝』28 p.482

仏を上首とする「比丘僧伽」：*Vinaya Pācittiya 032* (vol. IV p.074) = 上田天瑞訳『南伝』2 p.117、*Jātaka 489 Suruci-j.* (vol. IV p.315) = 山本智教訳『南伝』34 p.316

仏を上首とする「教団」：*Jātaka 078 Illisa-j.* (vol. I p.348) = 長井眞琴訳『南伝』29 p.172

仏を上首とする「僧団」：*MN.036 Mahāsaccaka-s.* (vol. I p.236) = 平木光二訳『原始経典』第4巻 中部経典I (春秋社 2004.7) p.528

仏を上首とする「修行者の一団」：*DN.016 Mahā-parinibbāna-s.* (vol. II p.088) = 中村元訳『ブツダ最後の旅—大パリニッバーナ経』(岩波文庫 1884.5) p.038

仏を上首とする「修行者たち」：*DN.016 Mahā-parinibbāna-s.* (vol. II p.098) = 中村元訳『ブツダ最後の旅—大パリニッバーナ経』(岩波文庫 1884.5) p.058

仏を上首とする「修行者のつどい」：*DN.016 Mahā-parinibbāna-s.* (vol. II p.98) = 中村元『ブツダ最後の旅—大パリニッバーナ経』(岩波文庫 1884.5) p.058

仏を上首とする「修行僧の一群」：*Jātaka 409 Daḷhadhamma-j.* (vol. III p.384) = 松本照敬訳『ジャータカ全集5』(春秋社 1982.9) p.102

[2-2] 「首」と訳するもの

仏を首とする「比丘等」：*Vinaya* 「葉捷度」(vol. I p.212) = 渡辺照宏訳『南伝』3 p.374、*Vinaya* 「葉捷度」(vol. I p.233) = 渡辺照宏訳『南伝』3 p.408

仏を首とする「比丘衆」：*Udāna 002-008* (p.016) = 増永靈鳳訳『南伝』23 p.110、*Vinaya* 「葉捷度」(vol. I p.213) = 渡辺照宏訳『南伝』3 p.375

仏を首として「比丘衆」：*MN.035 Cūlasaccaka-s.* (薩遮迦経 vol. I p.236) = 干瀉龍祥訳『南伝』9 p.409

仏を首とせる(する)「僧伽」：*Vinaya* 「葉捷度」(vol. I p.229) = 渡辺照宏訳『南伝』3 p.402、*Vinaya* 「葉捷度」(vol. I p.245) = 渡辺照宏訳『南伝』3 p.430

仏を首として「比丘僧伽」：*MN.085 Bodhirājakumāra-s.* (菩提王子経 vol. II p.093) = 青原慶哉訳『南伝』11上 p.125

仏を首とする「サンガの団体」：*Jātaka 180 Duddada-j.* (vol. II p.085) = 長井眞琴訳『南伝』30 p.138

[2-3] 「頭主」と訳するもの

仏を頭主とする「僧衆」：*Jātaka 264 Mahāpanāda-j.* (vol. II p.331) = 高田修訳

『南伝』31 p.96

[2-4] 「主」と訳するもの

仏を主とする「比丘僧団」：*MN.035 Mahāsaccaka-s.*(vol. I p.236)=片山一良訳『中部 根本五十経篇』Ⅱ p.191、*MN.085 Bodhirājakumāra-s.* (vol.Ⅱ p.093)=片山一良訳『中部 中分五十経篇』Ⅱ（大蔵出版 1998.3）p.239、*MN.091 Brahmāyu-s.*(vol.Ⅱ p.146)=片山一良訳『中部 中分五十経篇』Ⅱ（大蔵出版 1998.3）p.366

仏を主とする「僧団」：*Jātaka 264 Mahāpanāda-j.* (vol.Ⅱ p.331)=前田専学訳『ジャータカ全集3』（春秋社 1982.6）p.333

[2-5] 「初め、始め、はじめ、首め」と訳するもの

仏を初め「比丘衆たち」：*Jātaka 163 Susīma-j.* (vol.Ⅱ p.045)=立花俊道訳『南伝』30 p.070、*Jātaka 213 Bharu-j.* (vol.Ⅱ p.170)=前田専学訳『ジャータカ全集』3（春秋社 1982.6）p.063、*Jātaka 338 Thusa-j.* (vol.Ⅲ p.122)=立花俊道訳『南伝』31 p.510

仏を初め「比丘衆一同」：*Jātaka 163 Susīma-j.* (vol.Ⅱ p.045)=立花俊道訳『南伝』30 p.070

仏を初め「比丘たち一同」：*Jātaka 316 Sasa-j.* (vol.Ⅲ p.051)=立花俊道訳『南伝』31 p.390

仏を初め「修行僧ら」：*Suttanipāta 003-007* (p.111)=中村元『ブツダのことは』（岩波文庫 2008.1）p.127

仏をはじめ「修行僧の群れ」：*Suttanipāta 003-007* (p.111)=渡辺照宏『スッタニパータ』（世界の大思想Ⅱ-2 河出書房 1962.4）p.054

仏を首め、「比丘衆」：*Suttanipāta 003-007* (p.111)=水野弘元訳『南伝』24 p.215

仏をはじめとする「修行僧たち」：*Jātaka 213 Bharu-j.* (vol.Ⅱ p.170)=前田専学訳『ジャータカ全集3』（春秋社 1982.6）p.063

仏を初めとする「僧団の修行僧たち」：*Jātaka 044 Makasa-j.* (vol.Ⅰ p.247)=藤田宏達訳『ジャータカ全集1』（春秋社 1984.3）p.284

仏をはじめとする「修行僧の集団」：*Jātaka 489 Suruci-j.* (vol.Ⅳ p.315)=上村勝彦・長崎法潤訳『ジャータカ全集7』（春秋社 1988.10）p.035

仏をはじめとする「僧団」：*Jātaka 078 Illisa-j.* (vol.Ⅰ p.348)=田辺和子訳『ジャータカ全集2』（春秋社 1987.9）p.040

仏をはじめとする「僧団」：*Jātaka 180 Duddada-j.* (vol.Ⅱ p.085)=田辺和子訳『ジャータカ全集2』（春秋社 1987.9）p.333

仏をはじめとする「修行僧団」：*Jātaka 163 Susīma-j.* (vol.Ⅱ p.045)=田辺和子訳『ジャータカ全集2』（春秋社 1987.9）p.290

[2-6] 「率いる」と訳するもの

仏の率いられる僧団 (Buddhapamukhasaṅgha) <sup>(1)</sup>：*Jātaka 054 Phala-j.* (vol.Ⅰ p.270)=栗原廣廓訳『南伝』29 p.019



(1) この箇所は *Buddhapamukha bhikkhusaṅgha* とはされていない。

[2-7] このように区々であるが、ニュアンスとしては「首」とか「主」という語を使う訳語は、‘pamukha’の「前面」「はじめ」「先頭」に指導者というような意味合いを含ませて理解し、「初め」などの語を使う訳語は、あまりこのような意味を自覚せず、物理的な前後の次元のみで理解しているといえることができるであろう。

[3] 念のために、手近にある P.T.S. の英訳シリーズの訳語例を ‘pamukha’ に相当する訳語を中心に整理して掲げておく。

[3-1] ‘head’ とするもの

the Order of monks with the Awakened One at its head : *Vinaya* 「臥座具韃度」  
(vol. II p.147) = I.B.Horner ; *Book of the discipline* vol. V P.T.S. 1975  
p.205 他

the Order of monks with the enlightened one at their head : *Vinaya Pācittiya*  
032 (vol. IV p.074) = I.B.Horner ; *Book of the discipline* vol. II P.T.S. 1969  
p.310 他

the Order of monks with the Lord at its head : *Vinaya Pārājika* 001 (vol. III  
p.011) = I.B.Horner ; *Book of the discipline* vol. IV P.T.S. 1971 p.050 他

the Order of monks with the Buddha at their head : *AN.008-002-012* (vol. IV  
p.179) = E.M.Harer ; *Gradual sayings* vol. IV P.T.S. 1978 p.130 他

the Brotherhood with the Buddha at its head : *Jātaka 044 Makasa-j.* (vol. I  
p.247) = Robert Chalmers ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth*  
vol. I P.T.S. 1981 p.116、*Jātaka 316 Sasa-j.* (vol. III p.051) = W. H. D.  
Rouse ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol. IV P.T.S.  
1981 p.034、*Jātaka 078 Illisa-j.* (vol. I p.348) = Robert Chalmers ; *The Jātaka*  
*or stories of the Buddha's former birth* vol. I P.T.S. 1981 p.197

the Brotherhood with the Buddha at their head : *Jātaka 054 Phala-j.* (vol. I  
p.270) = Robert Chalmers ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth*  
vol. I P.T.S. 1981 p.135

The assembly of the Brethren with Buddha at their head : *Jātaka 338 Thusa-j.*  
(vol. III p.122) = H. T. Francis and R. A. Neil ; *The Jātaka or stories of the*  
*Buddha's former birth* vol. III P.T.S. 1981 p.081

[3-2] 仏弟子たちの側から ‘led’ とするもの

the Order of bhikkhus, led by the Buddha : *Suttanipāta 003-007* (p.111) =  
K.R. Norman ; *The group of discourses (Sutta-Nipāta)* P.T.S. 1984 p.099

[3-3] 仏弟子たちを ‘follower’ ‘brethren following’ ‘attendant’ とするもの

him and his followers : *Jātaka 213 Bharu-j.* (vol. II p.170) = W. H. D. Rouse ;  
*The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol. II P.T.S. 1981 p.119

the assembly of brethren following Buddha : *Jātaka 409 Daḷhadhamma-j.* (vol. III  
p.384) = H. T. Francis and R. A. Neil ; *The Jātaka or stories of the Buddha's*

*former birth* vol.Ⅲ P.T.S. 1981 p.233

the Buddha and his followers : *Jātaka 180 Duddada-j.* (vol.Ⅱ p.085) =W. H. D. Rouse ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol.Ⅱ P.T.S. 1981 p.059

the Buddha and his attendant Brethren : *Jātaka 264 Mahāpanāda-j.* (vol.Ⅱ p.331) =W. H. D. Rouse ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol.Ⅱ P.T.S. 1981 p.096

[3-4] 仏弟子たちを ‘company’ ‘friend’ とするもの

the Buddha and all his company : *Jātaka 489 Suruci-j.* (vol.Ⅳ p.315) =W. H. D. Rouse ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol.Ⅴ P.T.S. 1981 p.198

the Buddha and his friends : *Jātaka 163 Susīma-j.* (vol.Ⅱ p.045) =W. H. D. Rouse ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol.Ⅱ P.T.S. 1981 p.031

[3-5] 英訳においても訳語はさまざまであるが、[3-1] [3-2] [3-3] は仏を指導者的に見、[3-4] は仏と仏弟子を平等なものとしているということができよう。

[4] この語の用法には、他に「螺髻梵志ウルヴェーラカッサパは500人の螺髻梵志の ‘nāyaka’ であり、‘vināyaka’ ‘agga’ ‘pamukha’ ‘pāmokkha’ であり、螺髻梵志ナディーカッサパは300人の螺髻梵志の ‘nāyaka’ であり、‘vināyaka’ ‘agga’ ‘pamukha’ ‘pāmokkha’ であり、螺髻梵志ガヤーカッサパは200人の螺髻梵志の ‘nāyaka’ であり、‘vināyaka’ ‘agga’ ‘pamukha’ ‘pāmokkha’ であった」というふうに使われる場合がある<sup>(1)</sup>。‘nāyaka’ ‘vināyaka’ は「導く」「指導する」という意の√nīという動詞からできた言葉であるから、これらが単なる物理的な次元での「初め」「先頭」という意で使われていないことは明らかである。‘agga’には指導するという意はないが、しかし「第1」「最高」という意であって、単なる列挙する際の第一番目という意ではないであろう。‘pamukha’や‘pāmokkha’はこれらの語と列挙されるのであるから、この場合には明らかに、「指導者」という意が含まれていると解釈すべきであろう。

(1) *Vinaya* vol.Ⅰ p.024. なお ‘aṭṭha malla-pāmokkhā’ は「8人のマッラ族の首長」とでも訳すべき言葉である。DN. vol.Ⅱ p.160

[5] ちなみにアッタカターでは「ブッダを上首とするというのは (Buddhappamukhan ti)、ここにおいて等正覚者をサンガの長老となして坐しているサンガ (sammāsambuddhaṃ saṃghattheraṃ katvā nisinno saṃgho) がブッダを上首とするサンガといわれる」(AN.-A. vol.Ⅳ p.186) とか、「ブッダを上首とするというのは (Buddhappamukhan ti)、ブッダを指導者とし、ブッダをサンガの上座として着座していること (Buddhapaṇiṇāyakaṃ Buddhāṃ saṃghattheraṃ katvā nissinnaṃ) をいう」(Vinaya-A. vol.Ⅳ p.200) などと解釈されている。‘paṇiṇāyaka’ という言葉も√nīという動詞からできた言葉であり、「指導者」とか「将軍」などと訳される。

‘saṃghatthera’ という言葉はアッタカター以降の文献には頻出するが、パーリ聖典にはあまり使われず、わずか次の二つの用例が見いだされるのみである。

あるとき、一群の人々がサンガを食事に招待した。具寿舍利弗が saṃghatthera であった。Vinaya 「儀法毘度」 (vol. II p.212)

サッバカーミという名の地上の (pathavyā) saṃghatthera があった。Vinaya 「七百結集毘度」 (vol. II p.303)

なお前者には、同時に ‘thera-anuthera’ という言葉も使われている。‘anuthera’ は ‘thera’ に継ぐ者で、「副長老」というような意味をもつのであろう。また後者に出るサッバカーミは700結集のときの十事について、律に照らしあわせて判定をした比丘である<sup>(1)</sup>。

なお先のアッタカターの文章中に含まれている「坐している」ということばは、これから紹介する用例から分かるとおり、これらの語は世尊が食事に招待された時に使われるのが常であって、そのときの状況を表したものである。

- (1) ‘theratara bhikkhu’ という言葉もある。互いに姓と名をもって呼びあう。長老比丘 (上座の中のより上座) によって (theratarena bhikkhunā)、新参の比丘 (navakatara bhikkhu) は名あるいは姓によって、あるいは「君よ」ということばによって話しかけられるべきであるが (āvusovādena samudācaritabbo)、新参の比丘によっては長老比丘 (therataro bhikkhu) は「尊者よ (bhante)」とか、あるいは「具寿よ (āyasmā)」と呼びかけられるべきである。DN.16 Mahāparinibbāna-s. vol. II p.154

[6] 以上のように、‘pamukha’ が ‘nāyaka’ や ‘vināyaka’ という言葉の同意語として使われ、アッタカターの理解を参照すれば、仏を ‘pamukha’ とする比丘サンガは、「仏をはじめとして多くの比丘ら」というような意味ではなく、やはりこの中にはサンガを指導するという意を含んでいると見るべきであろう。本稿ではそのような意味で ‘pamukha’ を「上首」と訳するのが適当であると判断する。それは「第1論文」において釈尊が個別的な釈尊の「サンガ」を ‘pariharati’ すなわち「指導」すべきものと理解されていたことを考え合わせても納得されうる。

[7] なお先に掲げた訳例で「比丘衆」などと訳されている部分は、以下に紹介する例を見ていただければ分かるように、ほとんどが ‘bhikkhusaṃgha’ である。この語をことさらに意識したのは、この場合の ‘bhikkhusaṃgha’ は単に「集団」「衆」を表すのではなく、あくまでもテクニカルタームとしてのサンガであるということも十分に理解しておく必要があると考えるからであるが、これについては後述することにして、以下には取りあえず「比丘サンガ」と訳しておくことにしたい。

## [2] パーリ聖典における「仏を上首とするサンガ」の用例と実態

[0] パーリ聖典における「仏を上首とするサンガ」の用例には以下のようなものがある。この総合研究の方法論と文献観にのっとり、まず原始仏教聖典における全資料を紹介して、その後に考察を加える。原始仏教聖典というのは、経蔵と律蔵に含まれる文献をいう。なお

資料紹介にあたっては、‘*Buddhapamukha bhikkhusaṃgha*’の実態を知らしめてくれるような情報のみとし、原則としてすべて取意である。「仏を上首とするサンガ」がどのようなサンガであるかを示すような記述には、下線を施しておいた。

なおここでは注釈書文献は必要な時にのみ言及することにし、原則としてすべて省略する。また本論文の資料収集に当たっては、今この総合研究を手伝ってくれている東洋大学大学院の博士前期課程に在学中の仙仁晶君にお世話になった。記して謝意を表する。

[1] 以下がパーリの原始仏教聖典に見いだされる「仏を上首とするサンガ」の全資料である。「サンガ」の部分はほとんどが‘*bhikkhusaṃgha*’であるが、他の用語も含まれているので、すべてに原語を付しておいた。

- (1) 世尊はアングの人々の間を 500 人の比丘からなる大比丘サンガとともに (*mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ pañca-mattehi bhikkhu-satehi*) 遊行してチャンパーに到着され、ガッガラー蓮池のほとりに住された。そのときバラモンのソーナダントと種々の問答をされたあと、優婆塞となったソーナダントは「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (*saddhiṃ bhikkhusaṃghena*) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は比丘サンガとともに (*saddhiṃ bhikkhusaṃghena*) ソーナダントの住居に行き、行って設けの座につかれた。そこでソーナダントは仏を上首とする比丘サンガに (*Buddhapamukham bhikkhusaṃgham*) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した (*paṇītena khādaniyena bhojaniyena*)。DN.04 *Soṇadaṇḍa-s.* (種徳経 vol. I p.111)
- (2) 世尊はマガダの人々の間を 500 人の比丘からなる大比丘サンガとともに (*mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ pañca-mattehi bhikkhu-satehi*) 遊行してカーヌマタというマガダのバラモン村に到着され、アンバラッティカー園に住された。そのときクータダントバラモンは犠牲祭 (*yañña*) に関する問答を通して法眼を生じて、「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (*saddhiṃ bhikkhusaṃghena*) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は比丘サンガとともに (*saddhiṃ bhikkhusaṃghena*) クータダントバラモンの犠牲祭の場所に行き、行って設けの座につかれた。そこでクータダントバラモンは仏を上首とする比丘サンガに (*Buddhapamukham bhikkhusaṃgham*) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。DN.05 *Kūṭadanta-s.* (究羅檀頭経 vol. I p.127)
- (3) 世尊はコーサラの人々の間を 500 人の比丘からなる大比丘サンガとともに (*mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ pañca-mattehi bhikkhu-sattehi*) 遊行してサーラヴァティに入られた。そのときローヒッチャバラモンは「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (*saddhiṃ bhikkhusaṃghena*) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊はローヒッチャバラモンの住居に行き、設けの座につかれた。ローヒッチャバラモンは仏を上首とする比丘サンガに (*Buddhapamukham bhikkhusaṃgham*) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。DN.12 *Lohiccha-s.* (露遮経 vol. I p.224)
- (4) 世尊は大比丘サンガとともに (*mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ*)、王舎城を出発され、パータリ村に到着された。マガダの大臣であるスニーダとヴァッサカーラは「ゴータマは今日、比丘サンガとともに (*saddhiṃ bhikkhusaṃghena*) 私たちの食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は比丘サンガとともに (*saddhiṃ bhikkhusaṃghena*) マ

ガダの大臣であるスニータとヴァッサカーラの住居に行き、行って設けの座につかれた。そこでスニータとヴァッサカーラは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhu-samgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。DN.16 *Mahāparinibbāna-s.* (大般涅槃經 vol. II p.081)

〈5〉世尊はヴェーサーリーに到着してアンバパーリ園に住された。アンバパーリーは「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。リッチャヴィ人たちも「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私たちの食を受けて下さい」と食事に招待したが、世尊はすでにアンバパーリーの招待を受けていると言われた。世尊は翌朝、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) アンバパーリ園に行き、行って設けの座につかれた。そこでアンバパーリーは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。その時アンバパーリーは「この園林を仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhassa bhikkhusamghassa) 寄進します」と言い、世尊はこれを受けられた。DN.16 *Mahāparinibbāna-s.* (大般涅槃經 vol. II p.094)

〈6〉ある時世尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住しておられた。そのときニガンタ派の徒であるサッチャカは世尊と論争して敗れ、「ゴータマは明日、比丘サンガと共に (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。翌朝世尊はニガンタ派の徒であるサッチャカの園に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。そこでニガンタ派の徒であるサッチャカは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。MN.035 *Cūlasaccaka-s.* (薩遮迦經 vol. I p.227)

〈7〉あるとき世尊はコーサラの人々の間を大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim) 遊行された。その時世尊は阿難に過去のことで、迦葉仏の話がされた。(以下はその話の一部である) その時カーシ王であったキキーが「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。翌朝迦葉仏はカーシ王のキキーの住所に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。カーシ王のキキーは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食・噉食とを手ずから供養した。MN.081 *Ghaṭikāra-s.* (陶師經 vol. II p.045)

〈8〉ある時世尊はバグガのスンスマラ山のベーサカラー林の鹿苑に住しておられた。その時ボーディ王子はサンジカープッタ青年を使いをやり、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) ボーディ王子の食を受けてください」と食事に招待した。翌朝世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) コーカナダ宮殿に登り、設けの座につかれた。ボーディ王子は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。MN.085 *Bodhirājakumāra-s.* (菩提王子經 vol. II p.091)

〈9〉ある時世尊はヴィデーハ人の住んでいるところを 500人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim pañcamattehi bhikkhusatehi) 遊行さ

れた。その時ミティラーにブラフマーユ・バラモンが住んでおり、世尊が32相を具えていることを知って、「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食事を受けてください」と食事に招待した。翌朝世尊はブラフマーユ・バラモンの住居に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。その時ブラフマーユ・バラモンは七日間、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。MN.091 *Brahmāyu-s.* (梵摩経 vol. II p.133)

- (10) ある時世尊は釈迦族のカピラ城のニグロダ園に住されていた。そのときマハーパジャーパティー・ゴータミーは自分の織った衣を世尊に布施しようとした。世尊は「サンガに布施しなさい、あなたがサンガに布施すれば私も供養を受けるし、サンガも同じである (saṃghe, Gotami, dehi; saṃghe te dinne ahañ c' eva pūjito bhavissāmi saṃgho cāti) 」と言われた。これに対して阿難はマハーパジャーパティー・ゴータミーは養母であって恩を受けており、世尊からは三帰・五戒を授けられているのであるから受けるべきだと勧めた。世尊は阿難に14種の対人施 (cuddasa pātipuggalikā dakkhiṇā)、7種の僧類施 (satta saṃhagatā dakkhiṇā)、4種の施清浄 (catasso dakkhiṇāvissuddhiyo) を説かれた。その7種の僧類施が以下のように説かれる。次に、阿難よ、これら七種の僧類施がある。第1の僧類施は仏を上首とする両サンガに (Buddhapamukhe ubhatosaṃghe) 対する布施 (dānaṃ deti)。第2の僧類施は如来滅後の両サンガに (tathāgate parinibbute ubhatosaṃghe) 対する布施。第3の僧類施は比丘サンガに (bhikkhusaṃghe) 対する布施。第4の僧類施は比丘尼サンガに (bhikkhunisaṃghe) 対する布施。第5の僧類施は私のためにこれだけの数の比丘と比丘尼をサンガが指定してほしいと (ettakā me bhikkhū ca bhikkhuniyo ca saṃghato uddissathā ti) 願ってする布施。第6の僧類施は私のためにこれだけの数の比丘をサンガが指定してほしい (ettakā me bhikkhū saṃghato uddissathā ti) と願ってする布施。第7の僧類施は私のためにこれだけの数の比丘尼をサンガが指定してほしい (ettakā me bhikkhuniyo saṃghato uddissathā ti dānaṃ deti) と願ってする布施である。MN.142 *Dakkhiṇāvibhaṅga-s.* (施分別経 vol. III p.253)

- (11) ある時世尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住された。そのときニガンタの弟子であったシーハ將軍はニガンタナータプッタに止められたけれども振りきって世尊と会い、法眼を生じて、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊はシーハ將軍の住居に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。シーハ將軍は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。AN.008-002-012 (vol. IV p.179)

- (12) ある時世尊は舎衛城・祇多林の給孤独園に住されていた。そのとき世尊は給孤独長者に対して、「一人の見具足者に布施すれば大きな果を得ることができる。それよりも一人の一来者に……、それよりも一人の不還者に……、それよりも一人の阿羅漢に……、それよりも一人の独覺に……、それよりも如来・応供・正等覺者に……、それよりも仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) ……、それよりも

四方からやって来るサンガに (cātuddisaṃ saṃghaṃ) 精舎を建立する方が……、それよりも仏法僧に帰依する方が……、それよりも五戒を受ける方が……、それよりも慈心を修する方が……、それよりも無常想を修する方が果報が大きい」と説かれた。  
AN.009-002-020 (vol.IV p.392) その他 *Itivuttaka-A.* (vol.I p.091) 参照

- 〈13〉 あるとき世尊は、1250人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhim aḍḍhatelāsehi bhikkhusatehi) アングッタラーパの人々の中を遊行し、アーパナと名づけるアングッタラーパ国のある町に入られた。その時螺髻梵志ケーニヤは「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusaṃghena) 食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は「ケーニヤよ、比丘サンガは大人数で1,250人ですよ (bhikkhusaṃgho aḍḍhatelāsāni bhikkhusatāni) 」と言われた。ケーニヤはそれでも招待した。翌朝世尊はケーニヤの住所に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusaṃghena) 設けの座につかれた。ケーニヤは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhaṃ bhikkhusaṃghaṃ) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。 *Suttanipāta* 003-007 (p.102)
- 〈14〉 ある時世尊はクンディヤーのクンディッターナ村に住されていた。そのとき仏を上首とする比丘サンガは (Buddhapamukho bhikkhusaṃgho) 一人の優婆塞によって翌日の食事に招待されていた。その優婆塞は大目連の侍者 (Mahāmoggallānassa upatṭhāko) であった。世尊は目連に「今、コーリヤ人のスッパヴァーサー (Suppavāsā) が難産で苦しんでいるので、スッパヴァーサーに供養を譲るように」と説得させた。そしてスッパヴァーサーは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhaṃ bhikkhusaṃghaṃ) 7日の間、殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。 *Udāna* 002-008 (p.015)
- 〈15〉 ある時世尊はコーサラの人々の間を大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhim) 遊行された。その時一人の牧牛士が「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusaṃghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusaṃghena) 牧牛士の家に行き、行って設けられた座につかれた。牧牛士は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhaṃ bhikkhusaṃghaṃ) 水少なき粥や新しい醍醐味を手ずから供養した。 *Udāna* 004-003 (p.038)
- 〈16〉 あるとき世尊は、マガダ人の住むところを大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhim) 遊行され、パーティリ村に到着された。そのときマガダの大臣スーニダとヴァッサカーラは、「ゴータマは比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusaṃghena) 私たちの食を受けて下さい」と食事に招待した。翌朝世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusaṃghena) マガダの大臣スーニダとヴァッサカーラとの家に行き、行って設けられた座に着かれた。マガダの大臣スーニダとヴァッサカーラは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhaṃ bhikkhusaṃghaṃ) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。 *Udāna* 008-006 (p.085)
- 〈17〉 コーナーガマナ仏のとき、ダナンジャンニーとケーマーと私スメーダーの三人は、すべての部分が飾られた作りのよい園林を喜んでブッダを上首とするサンガに (Buddhapamukhasaṃghassa) <sup>(1)</sup> 捧げた。 *Apadāna* (p.512)

- (1) 異読では *Buddhapamukhassa saṃghassa* となっている。
- 〈18〉私（菩薩）は師（*satthar*）のもとに行き、正覚者（*Maṅgalabuddha* をさす）を上首とするサンガに（*sambuddhapamukhaṃ saṃghaṃ*）香華の花輪を捧げた。香華の花輪を捧げると、牛乳を饗応した。*Buddhavaṃsa* (p.029)
- 〈19〉その時私（菩薩）はジャティラ（*Jaṭila*）という名の王の家臣であったが、正覚者（*Padumuttarabuddha* をさす）を上首とするサンガに（*sambuddhapamukhaṃ saṃghaṃ*）手ずから食事と衣服を寄進した。*Buddhavaṃsa* (p.050)
- 〈20〉その時私（菩薩）はアリンダマという名のクシャトリヤであったが、正覚者（*Sikhibuddha* をさす）を上首とするサンガに（*sambuddhapamukhaṃ saṃghaṃ*）食べ物と飲み物を饗応した。*Buddhavaṃsa* (p.080)
- 〈21〉世尊はビンピサーラ王を上首とする 11 那由他のマガダのバラモン・居士（*ekādasanahutānaṃ Māgadhikānaṃ brāhmaṇagahapatikānaṃ Bimbisārapamukhānaṃ*）に遠塵離苦の法眼を生ぜしめた。そして王は「世尊は比丘サンガとともに（*saddhiṃ bhikkhusaṃghena*）私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は比丘 1,000 人よりなる大比丘サンガとともに（*mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ bhikkhusahassena*）王舎城に入った。その時帝釈天は子供の姿を化現して仏を上首とする比丘サンガ（*Buddhapamukhassa bhikkhusaṃghassa*）を先導し、偈を説いた。時に世尊はマガダ王セーニヤ・ビンピサーラの住処に行き、行って比丘サンガとともに（*saddhiṃ bhikkhusaṃghena*）設けの座につかれた。時にマガダ王セーニヤ・ビンピサーラは仏を上首とする比丘サンガに（*Buddhapamukhaṃ bhikkhusaṃghaṃ*）殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。そして「私は竹林園を仏を上首とする比丘サンガに（*Buddhapamukhassa bhikkhusaṃghassa*）施します」といい、世尊は園を受けられた。*Vinaya* 「大鍵度」 (vol. I p.037)
- 〈22〉その時マガダ国に五種の病、すなわち癩、癰、白癩、乾瘡、顛狂が多かった。人々は五種の病に罹りジーヴァカの許に行き、「師よ、願わくは我等を治してください」と言った。ジーヴァカは「私には仕事がたくさんあって、マガダ国のビンピサーラ王にも後宮にも仏を上首とする比丘サンガ（*Buddhapamukho ca bhikkhusaṃgho*）<sup>(1)</sup>にも近侍しなければならない」といって断った。そこで人々は出家した。ジーヴァカは病比丘を治すために王事ができなかった。しかも病気の治った比丘たちは還俗してしまった。そこでジーヴァカが五種の病気にかかった者は出家させないでほしいと願い出たので、世尊は「五種の病気にかかった者は出家させてはならない、悪作である」と定められた。*Vinaya* 「大鍵度」 (vol. I p.071)
- (1) この場合の比丘サンガは釈尊教団の可能性もある。しかし王舎城以外のサンガは含まないであろう。あるいは文字通り釈尊の直弟子たちを意味するかも知れない。
- 〈23〉その時、一人のバラモンが新しい胡麻と新しい蜜とを得た。そこでそのバラモンに思いが生じた。「これを仏を上首とする比丘サンガに（*Buddhapamukhassa bhikkhusaṃghassa*）施与しよう」と。そこでバラモンは世尊のところに行き、「ゴータマは比丘サンガとともに（*saddhiṃ bhikkhusaṃghena*）私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊はそのバラモンの住処に行き、行って比丘たちとともに



- (saddhim bhikkhusamgham) 設けの座につかれた。バラモンは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。Vinaya「葉韃度」(vol. I p.212)
- 〈24〉時に世尊は随意の間、王舎城に住して後、パーラーナシーに向って遊行された。そのとき優婆塞スッピーヤは、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は優婆塞スッピーヤの住処に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。優婆塞スッピーヤと優婆夷スッピーヤは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。Vinaya「葉韃度」(vol. I p.216)
- 〈25〉時に、世尊は随意の間パーラーナシーに住された後、1,250人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim adḍhatelasehi bhikkhusatehi) アンダカヴィンダに向って遊行された。その時、その地方の人々は多くの塩、油、米、嚼食を車に載せて仏を上首とする比丘サンガの (Buddhapamukhassa bhikkhusamghassa) 後に随って、「もし順番に当れば食を設けよう」と考えた。そのとき順番にあたらぬ一人のバラモンがあって、「もし順番に当れば食を設けようと考えて、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 随ってからもう2カ月をすぎた。まさに食堂を観察し食堂に見えない所の〔食〕を調べよう」と考えて、食堂になかった粥と蜜丸とを調べて世尊に、「ゴータマは私の粥と蜜丸とを受けてください」といった。世尊は「婆羅門よ、然らば比丘らに (bhikkhūnam) 施与せよ」といわれた。比丘等 (bhikkhū) は疑惧して受けなかった。世尊は「比丘らよ (bhikkhave)、受けて食せよ」といわれた。時にそのバラモンは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 多くの粥と蜜丸とを手ずから供養した。Vinaya「葉韃度」(vol. I p.220)
- 〈26〉その時新たに信心を得た一人の大臣があって、仏を上首とする比丘サンガは (Buddhapamukho bhikkhusamgho) 翌日の食事に招待されていた。時に彼に思念が生じた。「私は、まさに1,250人の比丘のために1,250鉢の肉を調べ、一々の比丘に一々の鉢の肉を奉ろう (adḍhatelasannam bhikkhusatānam adḍhatelasāni maṃsapātīsātāni paṭiyādeyyaṃ ekamekassa bhikkhuno ekamekaṃ maṃsapātīṃ upanāmeyyaṃ) 」と。時に彼はその夜を過ぎて殊妙なる嚼食と噉食と1,250鉢の肉とを調べ世尊に時を告げた。世尊は大臣の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時に彼は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。Vinaya「葉韃度」(vol. I p.222)
- 〈27〉世尊は随意の間王舎城に住された後、1,250人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim adḍhatelasehi bhikkhusatehi) パータリガーマに向かつて遊行された。時にマガダ国の大臣、スニダとヴァッサカーラは「ゴータマは今日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私たちの食を受けてください」と食事に招待した。世尊はマガダ国の大臣スニダとヴァッサカーラとの家に行き、

行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。マガダ国の大臣、スニダとヴァッサカーラとは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。

*Vinaya* 「薬毘度」 (vol. I p.226)

〈28〉時に世尊はコーリヤ村に至られた。その時姪女アンバパーリーはヴェーサーリーを出てコーリヤ村に行き、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。時にヴェーサーリーのリッチャヴィ等も「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私たちの食を受けてください」と招待した。しかしすでにアンバパーリーの招待を受けていると告げられた。世尊は翌朝姪女アンバパーリーの家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。アンバパーリーは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食を手ずから供養した。そして「わたしは、このアンバパーリー園を仏を上首とする比丘サンガ (Buddhapamukhassa bhikkhusamghassa) に施与したい」と言った。世尊は園を受けられた。*Vinaya* 「薬毘度」 (vol. I p.231)

〈29〉その時著名なるリッチャヴィ人たちは仏法僧を讃歎した。ときに世尊はニガンタナータプッタの弟子であったシーハ將軍を教化された。シーハ將軍は「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊はシーハ將軍の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。シーハ將軍は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。

*Vinaya* 「薬毘度」 (vol. I p.233)

〈30〉世尊は随意の間ヴェーサーリーに住された後、1,250人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim addhatelasehi bhikkhusatehi) バッディヤに向って遊行され、バッディヤジャーティヤーヴァナに住された。そのとき居士メンダカは、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は居士メンダカの家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時に居士メンダカは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。そして「世尊のバッディヤに住される間、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhassa bhikkhusamghassa) 常恒食 (dhuvabhata) をさしあげたい」といった。*Vinaya* 「薬毘度」 (vol. I p.242)

〈31〉時に世尊は随意の間バッディヤに住された後、居士メンダカに諮らずに1,250人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim addhatelasehi bhikkhusatehi) アングッタラーバ国に向って遊行された。居士メンダカはこれを聞いて追いかけて、道の途中で追いついて、「世尊は明日、比丘サンガと共に (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は居士メンダカの家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時に居士メンダカは1,250人の牧牛人に命じて言った。「一々の牝牛を牽いて

一々の比丘に侍し新しき乳を以て供養しよう」と。時に居士メンダカは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食と新しき乳とを手ずから供養した。比丘等 (bhikkhū) は疑惧して乳を受けなかった。世尊は「比丘らよ (bhikkhave)、受けて食せよ」といわれた。時に居士メンダカは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と食と新しき乳とを以て手ずから供養した。Vinaya「薬毘度」(vol. I p.243)

〈32〉時に世尊は次第に遊行してアーパナに到られた。そのとき螺髻梵志ケーニヤは飲料 (pāna) を整えて、「世尊は私の飲料を受けてください」といった。世尊は「ケーニヤよ、それでは比丘等に施与せよ (bhikkhūnaṃ dehi)」といわれた。比丘等は (bhikkhū) 疑惧して受けなかった。世尊は「比丘等よ (bhikkhave)、受けて食せよ」といわれた。時に螺髻梵志ケーニヤは、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 多くの飲料を手ずから供養した。そして「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は「比丘サンガは1,250人の比丘からなっています (bhikkhusamgho adḍhatelasāni bhikkhusatāni)」と言われた。ケーニヤは「それでもゴータマは比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」といった。世尊は螺髻梵志ケーニヤの庵に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時に螺髻梵志ケーニヤは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。Vinaya「薬毘度」(vol. I p.245)

〈33〉世尊は随意の間アーパナに住した後、1,250人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim adḍhatelasehi bhikkhusatehi) クシナーラーに向って遊行された。時にマッラ子ロージャは、食堂に菜と堅餅がないのを見て、「世尊は菜と堅餅を受けて下さい」と言った。世尊は「それなら比丘らに与えなさい (bhikkhūnaṃ dehi)」といわれた。比丘ら (bhikkhū) は疑いがあるが受けなかった。世尊は「比丘らよ (bhikkhave)、受けなさい」といわれた。時にマッラ子ロージャは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 多くの菜と堅餅とを手ずから供養した。Vinaya「薬毘度」(vol. I p.247)

〈34〉時にジーヴァカ童子はマガダ国のピンピサーラ王の痔瘻をただ一たび塗って除いた。時にマガダ国の王ピンピサーラ王は癒えて、五百の婦女をして一切の莊嚴をもって飾らせ、次に此を解いて積ましめ、ジーヴァカ童子に言った。「ジーヴァカよ、この五百の婦女の一切の莊嚴を以て汝に帰す」と。ジーヴァカは「大王よ、止めてください、わたしの仕事を命じて下さい」といった。そこで王は「ジーヴァカよ、それならば自分と後宮とおよび仏を上首とする比丘サンガ (1) とに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 侍せよ」と命じた。「わかりました、大王よ」とジーヴァカ童子はマガダ国のピンピサーラ王に応えた。Vinaya「衣毘度」(vol. I p.268)

(1) 資料〈22〉の註(1)を参照

〈35〉時に、世尊は随意の間バーラーナシーに住された後、舎衛城に向って遊行された。時にヴィサーカーミガーラマターは、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim

- bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は神通力をもってヴィサーカーミガーラマターの家に見われ、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時にヴィサーカーミガーラマターは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養してから、世尊に八願を請うた。Vinaya「衣鞞度」(vol. I p.290)
- 〈36〉世尊は随意の間、ヴェーサーリーに住した後、バツガ国に向って遊行され、バツガ国・スンスマーラギリ・ベーサカラヴァナ・ミガダーヤに住された。その時、ボーディ王子はサンジカープッタを遣わして、「世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊はコーカナダ堂に上り、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時にボーディ王子は、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。Vinaya「小事鞞度」(vol. II p.127)
- 〈37〉その時、世尊は王舎城、竹林迦蘭陀迦園に住された。時に王舎城の長老は一日にして六十の精舎を建てしめ、世尊に「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は王舎城の長老の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。王舎城の長老は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養し、「福業を願うが故に此処に六十の精舎を作らしめました。此等の精舎をどのようにいたしましょうか」と問うた。世尊は「居士よ、然らばこの六十の精舎を以てすでに来ておりこれから来るであろう四方からやってくるサンガに (āgatānāgatassa cātuddisassa samghassa) 奉上せよ」と答えられた。「わかりました」と王舎城の長老は世尊に答え、その六十の精舎を以てすでに来ておりこれから来るであろう四方からやってくるサンガに (āgatānāgatassa cātuddisassa samghassa) 奉上した。Vinaya「臥座具鞞度」(vol. II p.146)
- 〈38〉給孤独居士は所用で王舎城にやってきた。そのとき王舎城の長老によって翌日、仏を上首とするサンガが (Buddhapamukho samgho) 招待されているのを知った。そこで世尊に会いに行き、「世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は王舎城の長老の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時に給孤独居士は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養し、舎衛城で雨安居を過ごされることを請うた。Vinaya「臥座具鞞度」(vol. II p.154)
- 〈39〉時に、世尊は随意の間ヴェーサーリーに住された後、舎衛城に向って遊行された。その時、六群比丘の随従比丘等は仏を上首とするサンガ (Buddhapamukhassa samghassa) の前に行き、先に精舎を取り臥處を取って、「これは我等の阿闍梨に属す、此は我等に属す」と主張した。時に具寿舍利弗は仏を上首とするサンガ (Buddhapamukhassa samghassa) の後に往ったので、精舎は已に取られ、臥處を得られずに一の樹下に坐した。Vinaya「臥座具鞞度」(vol. II pp.160、163)
- 〈40〉時に、世尊は次第に遊行して舎衛城に至り、ジェータ林給孤独園に住された。時に給

孤独居士は「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は給孤独居士の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。給孤独居士は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養し、「私はジェータ林をどういたしましょうか」と尋ねた。世尊は「居士よ、然らばジェータ林をすでに来ておりこれから来るであろう四方からやって来るサンガに (āgatānāgata cātudisassa samghassa) 奉上せよ」といわれた。「わかりました」と給孤独長者は世尊に答え、ジェータ林を以てすでに来ておりこれから来るであろう四方からやって来るサンガに奉上した。Vinaya「臥座具捷度」(vol. II p.163)

〈41〉その時、世尊はヴェーランジャーのナレールのプチマダ樹の下に、500人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim pañcamattehi bhikkhusatehi) 住された。そのときヴェーランジャー婆羅門は、「ゴータマは比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) ヴェーランジャーにおいて安居するのを承知して下さい (adhivāsetu ca me bhavaṃ Gotamo Verañjāyaṃ vassāvāsaṃ)」と願い、許された。そして「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊はヴェーランジャー婆羅門の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。その時ヴェーランジャー婆羅門は、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。Vinaya Pārājika 001 (vol. III p.001)

〈42〉マガダ国王セーニヤ・ピンピサーラの血縁の者に邪命外道に出家した者があった。その時にこの邪命外道は、セーニヤ・ピンピサーラ王の許に行き、「大王、私は一切沙門に供養をなそうと思います」と言った。王は「大徳よ、もしあなたが仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 第一に食を供するならばそうしなさい (sace tvaṃ bhante ... paṭhamaṃ bhojeyyāsi evaṃ kareyyāsīti)」と答えた。そこで彼は比丘たちのもとに (bhikkhūnaṃ santike) 使いを送り、「比丘らは (bhikkhū) 明日、私の食を受けて下さい」といわせた。比丘たちは「別衆食は世尊によって禁止されている」と恐れて受けなかった。そこで彼は世尊のもとに至り、「大徳ゴータマも出家者であり、私もまた出家者です。出家者が出家者の施食を受けるのは相応しい。大徳ゴータマは明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は黙然としてこれを受けられた。そして「沙門の施食時には別衆食をとることを許す (anujānāmi bhikkhave samaṇabhattasamaye gaṇabhojaṃ bhuñjituṃ) 」と定められた。「沙門施食時」とは、何らかの出家者となった者が食をなすことであって、「沙門施食時である」と(認識して)食すべきである。Vinaya Pācittiya 032 (vol. IV p.074)

〈43〉その時仏世尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住されていた。その時ヴェーサーリーにおいて美味食の施食が続いて行われた。時に一人の貧しい雑役夫が考えた。「この諸人は誠を尽して施食をなす、この功德は少なくないであろう。自分もまた施食しよう」と。こうしてこの貧しい雑役夫はキラパティカの許に行き、「旦那さま、私は

仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhassa bhikkhusamghassa) 施食したいと思います。私の賃金を与えてください」と。キラパティカも信仰があったので、余分の賃金を与えた。この貧しい雑役夫は世尊のもとに行き、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は「賢者よ、大比丘サンガであることを (mahā bhikkhusamgho) 知りなさい」といわれたが、貧しい雑役夫は「世尊よ、大比丘サンガであってください (mahā bhikkhusamgho)。私は多量の木綿を調べ、木綿を添えて飲物を十分に調べましょう」と言った。世尊はその貧しい雑役夫の住処に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。貧しい雑役夫は食堂において比丘たちを (bhikkhū) 給仕した。 *Vinaya Pācittiya 033 (vol.IV p.075)*

[2] 煩を恐れず、調査しえた範囲の「仏を上首とするサンガ」の用例のすべてを紹介した。これについて若干の考察を施してみよう。上記の資料にはすべてに「仏を上首とする (Buddhapamukha)」という言葉は入っているのであるが、上記資料をいくつかの視点で分類してみると次のようになる。

[2-1] まず「サンガ」であるが、全 43 例のうち、〈10〉の ‘ubhatosamgha’ (両サンガ)、〈17〉 〈18〉 〈19〉 〈20〉 〈39〉の ‘samgha’ を除いて、他の 37 例はすべて ‘bhikkhusamgha’ である。「両サンガ」はもちろん比丘サンガと比丘尼サンガを意味するが、‘samgha’ とのみするものは「比丘サンガ」を意味すると解して差し支えないであろう。

もちろん理念的には、釈尊は比丘・比丘尼の両者を含む全出家修行者のリーダーであることには違いないのであるが、「仏を上首とするサンガ」は現実的なサンガであって、釈尊は男性であるから、いかに仏と言えども比丘尼サンガの現実的な意味での「上首」にはなれないということであろう。

[2-2] この「仏を上首とする比丘サンガ」が現実的なサンガであったことは、文脈上からこれらの構成人数が示されていることから明らかである。‘bhikkhusamgha’ の人数が明示されているものを列挙してみると次のようになる。

500 人の比丘からなる大比丘サンガとするもの： 〈1〉 〈2〉 〈3〉 〈9〉 〈41〉

1,000 人の比丘からなる大比丘サンガとするもの： 〈21〉

1,250 人の比丘からなる大比丘サンガとするもの： 〈13〉 〈25〉 〈26〉 〈27〉 〈30〉  
〈31〉 〈32〉 〈33〉

人数は示されないが大比丘サンガとするもの： 〈4〉 〈7〉 〈15〉 〈16〉 〈43〉

このように、「仏を上首とする比丘サンガ」の「サンガ」は、けっして理念的なサンガではなく、おそらく釈尊が直接に指導されていたであろうサンガであったことが推測される。

[2-3] これらのうち大部分は、これら「仏を上首とする比丘サンガ」は何らかの布施の対象とされているのであるが、何を布施されるかで分類してみると、〈10〉の 7 種の僧類布施、〈12〉の不特定のもの、〈15〉の水少なき粥と新しい醍醐味、〈17〉の園林、〈18〉の香華の花輪・牛乳、〈19〉の食事と衣服、〈20〉の食べ物と飲み物、〈25〉の粥と蜜丸、〈32〉の飲料、〈33〉の菜と堅餅を除いて、他のすべては翌日あるいはその日の殊妙なる

嚼食と噉食と表現される食事である。

このように食事を主とする何らかの品物が布施されるということは、それを受けるサンガは、食事などを享受できる現実的なサンガであるということであって、これも「仏を上首とするサンガ」が理想的なものではなく、現実的なサンガであったということを証明する。

布施以外は〈22〉〈34〉のジーヴァカの病気の治療と、そして〈39〉のただその後をついて行った、とするもののみである。もちろん〈39〉はその後にしたがって遊行したのであるから、現実的なサンガであることは言うまでもないが、ジーヴァカの病気治療がどの範囲のサンガであるかは詳らかではない。しかしその他の「仏を上首とするサンガ」がすべて現実的な「釈尊をリーダーとする500人とか1,250人の比丘からなる大比丘サンガ」とすれば、やはりこれもそのように理解すべきであろう。とするならば、ジーヴァカは不特定のすべての仏教の出家者の病気を治療する役割を与えられていたのではなく、いわば特定の現実的な「仏を上首とするサンガ」を治療するのがその役割であったのであろう。おそらくそれはピンピサーラが釈尊に対する布施の一環として、ジーヴァカに「仏を上首とするサンガ」の構成員の病気治療を命じたものであったのであろう。

なお〈5〉〈21〉〈28〉は食事を招待した後、園林を「仏を上首とする比丘サンガ」に寄進したとされ、また〈37〉〈40〉は精舎を「すでに来ており、これから来るであろう四方からの出家修行者を含めたサンガ」に寄進したとされ、〈30〉は「仏を上首とする比丘サンガ」に常恒食をさし上げたいと申し出て許されたとしている。

食事の布施は「仏を上首とする比丘サンガ」に対してなされたとしても、精舎や園林などの不動産は「すでに来ており、これから来るであろう四方からの出家修行者を含めたサンガ」に寄進されるのが望ましいとされている。しかしながらそうでないケースもあったということであり、それがいかなる理由によるものかは後の機会の検討課題としたい。

[3] 以上のように「仏を上首とするサンガ」の用例の大部分は「比丘サンガ」であって、それらは500人とか1,000人、1,250人と限定される比丘たちからなる、釈尊とともに遊行し、釈尊とともに食事の招待を受け、釈尊とともにその家に行き、そして設けの座に坐して、釈尊とともに食事の饗応を受け、釈尊とともに布施を受けるという、釈尊が直接に指導されていた現実的な目の前にある「比丘サンガ」であって、けっしてインド各地に散在する比丘・比丘尼のすべてを統括するような理念的な「釈尊のサンガ」ではないことは明らかである。

ただし〈10〉の「仏を上首とする両サンガ」は不特定の比丘サンガならびに比丘尼サンガをさすものであろう。なぜなら「仏を上首とする両サンガ」に続くものは、「如来滅後の両サンガ」「比丘サンガ」「比丘尼サンガ」であり、仏在世時代と仏入滅後に分けているにすぎないからである。

なおこの「仏を上首とする比丘サンガ」のメンバーの中に釈尊自身が含まれるかどうかについては後述する。

[4] 以上はパーリ聖典の用例であるが、これに対応する漢訳聖典ではどのようになっているであろうか。「仏上首比丘僧伽」のようなそのまま直訳したような語形は見いだせないので、対応経のあるいくつかの経あるいは律を調査してみよう。ここでは「上首」に相応す

る言葉と、「サンガ」に相応する言葉にアンダーラインをひいておく。

[4-1] 〈1〉の相当漢訳である「長阿含經 22」『種徳經』（大正 01 p.094 上）には、種徳バラモンが釈尊に帰依するけれども、食事に招待する場面はない。

〈2〉の相当漢訳である「長阿含經 23」『究羅檀頭經』（大正 01 p.096 下）では、食事に招待する場面は、「重白佛言。唯願世尊。更受我七日請。爾時世尊默然受之。時婆羅門即於七日中手自斟酌供佛及僧」となっているのみであって、「上首」という意を表す語は使われていない。

〈3〉の相当漢訳である「長阿含經 29」『露遮經』（大正 01 p.112 下）では、釈尊と弟子たちを食事に招待する場面は「婆羅門聞法已白佛言。唯願世尊及諸大衆明受我請」とされ、露遮バラモンのところに行く場面は「爾時世尊即著衣持鉢。從諸弟子千二百五十人俱詣婆羅林」「爾時世尊至婆羅門舍就座而坐。時婆羅門以種種甘膳手自斟酌供佛及僧」とする。「諸弟子千二百五十人を從えて俱に」というのであるから、ここには「上首」の意味が含まれていると解してよいであろう。

〈7〉の相当漢訳は「中阿含經 63」『鞞婆陵耆經』（大正 01 p.499 上）であるが、ここでは波羅捺迦私国の類鞞王が迦葉仏を招待する場面は、「叉手而向白迦葉如來無所著等正覺曰。唯願世尊。明受我請及比丘衆」とされ、その家に行く場面は「諸比丘衆侍從世尊往詣類鞞王家。在比丘衆上敷座而坐」となっている。このなかの「諸比丘衆は侍從して」と「比丘衆の上に在りて」が、釈尊が上首であることを含意しているかも知れないけれども、ここでもパーリ聖典のように明確には表現されていない。

このような食事の招待以外のケースでは、〈10〉の相当漢訳である中阿含 180「瞿曇彌經」（大正 01 p.722 上）は「佛在世時。佛爲首施佛及比丘衆。是謂第一施衆。得大福、得大果、得大功德、得大廣報」としており、「佛爲首」が「仏を上首とする」に相当するであろう。

また〈22〉の相当漢訳には『四分律』（大正 22 p.808 下）、『五分律』（大正 22 p.116 上）、『十誦律』（大正 23 p.152 下）、『僧祇律』（大正 22 p.420 中）、『根本有部律』（大正 23 p.1034 下）があるけれども、いずれも「仏を上首とする」などの語句は含まれていない。

また〈34〉の相当漢訳は「王言。汝不得治餘人病。唯治我病佛及比丘僧宮内人」『四分律』（大正 22 p.852 中）とするのみである。

[4-2] このように漢訳の原始仏教聖典では、それを含意すると見なされうる語句は存するが、パーリ聖典の「仏を上首とする」にそのまま相当するような表現は存在しない。

しかし漢訳の原始聖典においても、釈尊は1,250人とか500人の比丘などと共に遊行され、食事の招待を受けられ、そして彼らに説法されたということは変わらないのであるし、その釈尊とともに行動する比丘たちが「サンガ」であることはきちんと認識されていたように思われるから、「仏を上首とするサンガ」という言葉は用いられていなくても、釈尊を指導者とする「大比丘サンガ」が認識されていたことには違いがないであろう。

[5] ちなみに原始仏教聖典における一般的な対告衆の数である1,250人は、三迦葉の弟子たち1,000人と、舍利弗・目連の仲間たち250人を加えたものと理解されている。この併せて1,250人が、「仏を上首とする比丘サンガ」と理解されたのは、おそらく彼らが「白四



羯磨具足戒」によってではなく、「善来比丘具足戒」によって釈尊の直接の弟子となったとされるからであろう。

「善来比丘具足戒」は、「私は願わくば世尊のみもとにおいて、出家して具足戒を得たい (labheyāham bhante bhagavato santike pabbajjam, labheyam upasampadam)」と願い出て、釈尊がサンガに諮ることなく「来れ比丘よ (ehi bhikkhu)」<sup>(1)</sup>と許されたものであるから、これら「善来比丘具足戒」によって出家を許された比丘たちは、釈尊が親しく指導された弟子たちであると考えられるからである。ちなみに『四分律』は「我今欲於如来所修梵行」「来比丘」とし<sup>(2)</sup>、『五分律』は「願与我出家受具足戒」「善来比丘」とする<sup>(3)</sup>。

余談であるが律蔵によれば、「白四羯磨具足戒」が制定される前に、「三帰具足戒」が許されたことになっている。パーリ律蔵の「受戒羯度」や『四分律』の「受戒法」によれば、「三帰具足戒」が許されたのは、鹿野苑からウルヴェーラーに行かれる前になっているので、したがって三迦葉の弟子たち 1,000 人と、舎利弗・目連の仲間たち 250 人を教化する前ということになる。したがって律蔵の「受戒羯度」が歴史的順序にしたがって書かれているとするならば、三迦葉や舎利弗・目連は「三帰具足戒」で受戒してもよかったということになるが、『大般涅槃經』においてスバダの善来比丘具足戒による出家が描かれるように<sup>(4)</sup>、「三帰具足戒」や「白四羯磨具足戒」が制定された後も、釈尊にはサンガに諮ることなく、「善来比丘具足戒」で自分の弟子を取る特権が付与されており、そのように弟子になったものは釈尊の「直接の弟子 (sakkhi-sāvaka)」と認識されていたから<sup>(5)</sup>、三迦葉や舎利弗・目連の仲間たちが「善来比丘具足戒」で釈尊の直弟子になったとしても不思議はないわけである。

またこの三帰具足戒が許されるようになった理由は、諸国に布教に出された弟子たちが釈尊から善来比丘具足戒を受けるために行ったり来たりして、疲れ果てた結果であるとされるから、三帰具足戒で弟子たち自身が出先で自分の弟子を取ってよいと定められたのは、諸国に弟子たちを布教に出される前、すなわち同時に釈尊がウルヴェーラーに出発される前ということはある。したがって史実としては、「三帰具足戒」が許されたのは、少なくとも三迦葉と 1,000 人の螺髻梵志に善来比丘具足戒を与えられた後であって、『パーリ律』<sup>(6)</sup>『四分律』<sup>(7)</sup>『五分律』<sup>(8)</sup>『根本有部律』<sup>(9)</sup>『僧祇律』<sup>(10)</sup>などは、三迦葉と 1,000 人の徒衆も、舎利弗・目連と 250 人の仲間もすべて「善来比丘具足戒」で出家したとされている。

たであろう。あるいは舎利弗・目連とその仲間 250 人に善来具足戒を与えた後であったかも知れないが、これについてはまた別の機会に論じたい。ともかく三迦葉の 1,000 人の弟子たちと、舎利弗・目連の 250 人の仲間たちは、釈尊によって直接に「善来比丘戒」を与えられたと考えられていたのである。

1,250 人という釈尊の直弟子たちはこのように理解されるのであるが、「仏を上首とする比丘サンガ」の数が、1,250 人であったり、1,000 人あるいは 500 人であったりするにはそれほど意味はないようにも思われる<sup>(11)</sup>。むしろ「仏を上首とする比丘サンガ」の構成員がいつも一定でなく、たえず変化しえることが前提になっていることの方が、重要であろう。次節において述べるように、三迦葉や舎利弗・目連などが「仏を上首とするサンガ」を離れて独立していき、彼ら自身を「上首とするサンガ」が成立することも当然ながら想定さ

れうるからである。

なお「仏を上首とする比丘尼サンガ」が存在しないのは、先にも指摘しておいたようにこの比丘サンガが現実的なサンガであって、釈尊といえども男性であるから、理念的な指導者とはなりえても、現実に比丘尼サンガのメンバーとなって、そのリーダーになることはできないからである。

- (1) Vinaya (vol. I p.12)
- (2) 大正 22 p.788 下
- (3) 大正 22 p.105 上
- (4) 法顕訳「大般涅槃經」(大正 01 p.204 中)は「我今欲於佛法出家。於是世尊即便喚之。善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。即成沙門」とし、白法祖訳「仏般泥洹經」(大正 01 p.171 上)は「願佛加哀。受我爲沙門。須拔髮自然墮地。袈裟著體」とし、失訳「般泥洹經」(大正 01 p.187 下)は「異學須跋。願受衆祐自然法律。捨家就戒沙門之行(以上は阿難の言葉)。佛以可其就戒之志曰。是吾未後得證見淨者。異學須跋也。即授戒爲比丘。一心受不放逸。以健制以志惟以斷却。如所欲下鬚髮被袈裟」とし、『Mahāparinirvāṣūtra』(和訳・下 p.645)は阿難が「遍歴行者であるスバドラはよく説かれた教えと戒律とにおいて出家し、完全な戒律、修行者たる状態を得ようと望んでいる」と釈尊に伝え、釈尊は「来れ、修行僧よ、清浄行を行え」といわれた。それがスバドラの出家であったとする。また別訳雑阿含 110 (大正 02 p.413 下)も「須跋陀羅。於佛法中。願樂出家。爾時世尊。即告須跋陀羅。善來比丘。鬚髮自落。法衣著身。即得具戒」とし、雑阿含 979 (大正 02 p.254 中)も「是須跋陀羅外道出家。今求於正法律出家受具足得比丘分。爾時世尊告須跋陀羅。此比丘來修行梵行。彼尊者須跋陀羅。即於爾時出家。即是受具足成比丘分」とする。DN.016 'Mahāparinibbāna-s.' (大般涅槃經 vol. II p.152)は阿難に出家せしめたとするが、「彼は世尊の最後の直接の弟子であった (so bhagavato pacchimo sakkhi-sāvako ahoṣi)」とする。また長阿含 002「遊行經」(大正 01 p.025 中)も「於是須跋即於其夜。出家受戒淨修梵行」とした後で、「是爲如來最後弟子」とする。
- (5) 上記註の中の DN.016 Mahāparinibbāna-s. 長阿含 002「遊行經」の文章を参照。
- (6) Vinaya vol. I p.33, 42
- (7) 大正 22 pp.796 中、799 上
- (8) 大正 22 pp.109 中、110 下
- (9) 大正 23 p.1027 上
- (10) 大正 22 p.412 下
- (11) パーリの DN.は 500 人とする場合が多く、少数であるが 1,250 人とする。MN.SN.AN.には人数が示されない。漢訳の『長阿含』は大部分が 1,250 人とされ、『中阿含』は大部分が「諸比丘」「大比丘衆」とするが、一部に 500 人とする経がある。『雑阿含』も大部分は「諸比丘」とするが、一部の経には 1,250 人、500 人、40 人とするものがある。『増一阿含』も大部分が「諸比丘」とするが、500 人とする経も相当数あり、一部は 1,250 人とする。

[6] なお 'pamukha' という言葉には、「指導者」という意が含まれているということを書いた。それではこの「指導」の内容はどのようなものであったのであろうか。しかしこれは今さら議論するまでもなく、「経蔵」や「律蔵」に描かれている釈尊の活動そのものが「指導」の内容であったということが出来る。なぜなら「経蔵」や「律蔵」の対告衆は 1,250 人とか 500 人、あるいは諸比丘、大比丘衆とされ、それは「仏を上首とする比丘サンガ」に他ならないからである。

ただし ‘pamukha’ という言葉は舍利弗・目連などの仏弟子にも使われるのであるが、彼らの「指導」と仏の「指導」はおのずからに相違するものがあつたであろう。これについては後述する。

[7] 最後に「仏を上首とする比丘サンガ」という語句の中に含まれる「サンガ」という語のもつ意味を考えておこう。

[7-1] 多くの和訳者はここで使われている ‘bhikkhusaṃgha’ あるいは ‘saṃgha’ を、「比丘衆」「比丘衆たち」「比丘衆一同」「比丘たち一同」「修行僧ら」「修行僧の群れ」「比丘集団」「比丘等」「僧衆」などと訳している。これらはおそらく「サンガ」の意味をそれほど厳密に捉えていない結果として採用された訳語であろう。「比丘僧伽」「僧伽」「サンガの団体」「比丘僧団」「僧団」「教団」と訳されている場合は、表面上は「サンガ」という言葉を、単に「集団」を意味するものではないということが自覚されているようにみえるけれども、テクニカルタームとしての、あるいは律蔵用語としての「サンガ」が認識されているかどうかはわからない。

[7-2] しかし原始仏教聖典において使われている ‘bhikkhusaṃgha’ あるいは ‘saṃgha’ は、特に「律蔵」の中に使われている場合は、決して単なる「集団」を意味するのではなく、きちんとテクニカルタームとしての「サンガ」と認識されなければならない。先に紹介した資料から分かる通り、「仏を上首とする比丘サンガ」という語句が使われる多くの場面は食事を招待された時のことである。律蔵においては、パーリ波逸提 32 が「別衆食 (gaṇabhojana) を取ってはならない。病時・施衣時・作衣時・行路時・乗船時・大衆会時・沙門施食時は除く」と定められ、「別衆食 (gaṇabhojana) とは 4 人以上の比丘が五種正食中の一をもって招待され、食するときこれを衆食となづく」と解説されているように<sup>(1)</sup>、原則として食事の招待はその時点でこのサンガを構成している比丘全員が含まれていなければならない。結果的にそれがサンガを構成する比丘の一部となってしまう場合には、それは「別衆」ということになってしまい、「サンガ」とは称しえないどころか、波逸提の罪となるのである。そこで〈42〉では、邪命外道の食事の供養を、比丘たちは「別衆食は世尊によって禁止されている」と恐れて受けなかったのである。

そしてこの戒条は提婆達多が利養と名聞を失って、他の比丘たちとは別に請食したために定められたものとされるように、破僧に関わるきわめて重要な規定なのであって、〈32〉〈43〉などはこのサンガが 1,250 人ももの比丘からなる「大比丘サンガ」であるが、それでもよろしいかと念を押しているのは、比丘の集団への食事の供養は、原則として一人の漏れもなく、全員のメンバーがそろった、律蔵で定められたサンガの条件が整ったサンガに対してでなければならないからである。

もちろん施主の都合によってはサンガの中から選ばれた数人が招待を受ける場合も許されている。けれどもそれはサンガの意思によって選ばれたものでなければならない。たとえばサンガが法臘順や籤引きなどによって決めるのであって、それが資料〈10〉に表わされている。このような場合は、サンガがそれをサンガ全員でないことを承知していることであるから「別衆」とはならないけれども、もちろんこのような一部の者たちを「サンガ」とは称しえない。

したがってここに‘saṃgha’という言葉が使われているのは、‘gaṇa’すなわち別衆ではなく正式な「和合サンガ」であるということを表していると言解しなければならない。その証拠に、〈25〉〈31〉〈33〉などはこのサンガで釈尊を除く比丘たちをいう場合には‘bhikkhū’、すなわち「比丘たち」という言葉が用いられているのである。

- (1) *Vinaya* vol.4 p.74。 また出家修行者は乞食で食を得ることが望ましいが、余得 (atirekalābha) も認められている。これはサンガ食 (saṃghabatta) と別請食 (uddesabhatta) と招待食 (nimantana) と行籌食 (salākabhatta) と半月食 (pakkhika) と布薩食 (uposathika) と月初日食 (pāṭipadika) である。*Vinaya* (vol.1 p.95)

[7-3] とはいいいながら、釈尊は当然のことながら目の前にいる 1,250 人の比丘たちや 1,000 人の比丘たちの背後に、すべての比丘や比丘尼たちを見ておられたことは言うまでもない。直接の指導はこの 1,250 人や 1,000 人の比丘たちにされたが、それはすべての比丘や比丘尼たちへの指導でもあったわけである。

また次節で述べる「仏弟子たちを上首とするサンガ」資料の〈1〉や〈4〉に見られるように、「仏弟子たちを上首とするサンガ」や多くの比丘たちが、「仏を上首とするサンガ」と合流して一つのサンガを形成することも常にあったことであろう。布薩の日にでも当たれば、当然のことながら一つの界に住することになるすべての出家修行者は、一つのサンガとして布薩羯磨を行うことになるからである。そして次の【論文 14】に書くように、比丘たちは雨安居の前や後に、釈尊を訪ねて指導を受けるのが常であったから、そのようなことはしばしば起こったであろう。したがってこのような際には、「仏を上首とするサンガ」のメンバーは、仏が善来具足戒で出家させた「直弟子」たちだけでなく、合流している比丘たちもそのメンバーの中に入ることになる。対告衆の数が一定しなかったり、「諸比丘」「大比丘衆」などとされ、人数が特定されないのは当然であったといえることができる。

[8] 以上のように、「仏を上首とする比丘サンガ」ないしは「仏を上首とするサンガ」は、仏が「指導する」、500 人とか 1,000 人、1,250 人、あるいは「諸比丘」「大比丘衆」からなる、現実的な律蔵の規定にのっとった「サンガ」であって、けっして単なる比丘たちのぼんやりとした集団ではないということになる。このような意味では、先に紹介した翻訳者である日本の仏教学者たちの多くは、‘Buddhapamukha bhikkhusaṃgha’を正確に理解していなかったということになるであろう。

また同時に「仏を上首とするサンガ」が、釈尊によって仏教の出家者のすべてが統合されるような意味での「釈尊のサンガ」でもなく、また釈尊を中心に理念的な紐帯で結びついた「釈尊のサンガ」というものをも意味しないということも明らかである。

あるいは日本の宗派的な組織を考えるなら、この 1,000 人とか 1,250 人とかなる「仏を上首とするサンガ」が統括宗教法人の本部となって、全国に散らばるたくさんの個別法人としての「仏弟子たちを上首とするサンガ」を統括する、いわば本山のような機能も併せ持つものとなったであろうが、次の【論文 14】において述べるように、「釈尊のサンガ」は中央集権的なレギュラーチェーン店方式的な組織ではなく、ゆるやかなフランチャイズチェーン店方式的な組織であったために、「仏を上首とするサンガ」が本山的機能をはたす必要はなく、活動としては「仏弟子のサンガ」と同様なことを行えばそれでよかったように思われる。

[9] しかしながらこの「サンガ」の中に仏が含まれるのか、それとも仏は除外されるのかは微妙であって、部派仏教になってからこれが論議されることになる。ちなみに資料〈10〉〈12〉にはこれに関係のありそうな記述がなされている。また「仏を上首とするサンガ」が「仏弟子を上首とするサンガ」と同等のものであると考えるならば、仏もサンガの一員であったと理解しなければならないであろうが、しかしこの問題は本論には直接の関係はないから、もし必要ならば別の機会に論じたい<sup>(1)</sup>。

(1) 本『モノグラフ』第11号に掲載した提婆達多論文でも触れたように、釈尊が提婆達多が破僧したそのサンガの一員であったかどうかは微妙である。

### [3] パーリ聖典における「仏弟子を上首とするサンガ」の用例と実態

[0] 次に「仏弟子を上首とするサンガ」の検討に移りたい。「仏を上首とするサンガ」の規模が1,250人とか1,000人、500人と多いことはともかくとして、4人以上からなる現実的なサンガをさすかぎり、「仏弟子の誰かを上首とするサンガ」が存在しえるであろうことは十分に推測されるところである。

[1] まずパーリの原始聖典の中に現れる、仏弟子の誰かを「上首とするサンガ」と表現する用例を紹介する。以下にはそれらのサンガを示すような語句にアンダーランを付しておく。

- (1) 世尊がチャートゥマー (Cātumā) のアーマラキー園におられたとき、舍利弗・目連を上首とする 500 人の比丘たちが (SāriputtaMoggallānapamukhāni pañcamattāni bhikkhusatāni) 世尊に会うためにやって来て、新来比丘たちは旧住比丘たちと (āgantukā bhikkhū nevāsikehi bhikkhūhi saddhiṃ) 挨拶を交わして騒がしかった。そこで釈尊は叱って去らしめた。チャートゥマーの釈迦族や梵天がこれを留めて、もしこのまま去らしめれば異心・変心が起こるかも知れないと世尊をなだめた。世尊は心を和らげ、舍利弗と目連に次のように問うた。「自分が比丘サンガを去らしめたとき、あなたたちはどのように考えたか」と。舍利弗は「世尊は今静かに現法樂住に住されるのであろう。我等も今静かに現法樂住に住しようと考えました」と答えた。世尊は「待て、そのような心を再び起こしてはならない」と叱られた。目連は「世尊は今静かに現法樂住に住されるのであろう。今は私と舍利弗が比丘サンガを指導しよう (ahañ ca dāni āyasmā ca sāriputto bhikkhusaṃghaṃ pariharissāma) と考えました」と答えた。世尊は「善哉、善哉、実に、私かあるいは舍利弗と目連が比丘サンガを指導するべきである (ahaṃ vā hi bhikkhusaṃghaṃ parihareyyaṃ SāriputtaMoggallānā vā)」と説かれた。MN.67 Cātuma-s. (車頭聚落經 vol.I p.459)
- (2) あるとき世尊は舍衛城のジェータ林の給孤独園に住されていた。その時ヴェールカンダカ村の住人、ナンダマター優婆夷は舍利弗と目連を上首とする比丘サンガに (SāriputtaMoggallānapamukhe bhikkhusaṃghe) 六支具足の布施をなした

(*chaḷaṅgasamannāgatam dakkhiṇaṃ patitṭhāpeti*)。世尊はこれを天眼をもって見られて、比丘らよ、かのヴェールカンダカの住人、ナンダマター優婆夷は舎利弗と目連を上首とする比丘サンガに (*SāriputtaMoggallānapamukhe bhikkhusaṃghe*) 六支具足の布施を作す、何が六支具足の布施であるか、……と説法された (1)。

AN.006-004-037 (vol.III p.336)

- (1) 「六支具足の布施」とは、布施するより前に心喜び、布施するとき心が清らかになり、布施してから満足するのが施者の三支であり、貪を離れあるいは貪を離れようと努力し、瞋を離れあるいは瞋を離れようと努力し、癡を離れあるいは癡を離れようと努力することが受者の三支である、とされている。

〈3〉ある時具寿舎利弗と具寿目連は大比丘サンガとともに南山において遊行していた (*āyasmā ca Sāriputto āyasmā ca Mahāmoggallāno Dakkhiṇāgirismiṃ cārikaṃ caranti mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ*)。……その時、ヴェールカンタキー・ナンダマター優婆夷のところに毘沙門天が現れ、明日舎利弗と目連を上首とする比丘サンガは (*SāriputtaMahāmoggallānapamukho bhikkhusaṃgho*) 朝食をなさずしてヴェールカンタカにやって来るから、この比丘サンガに供養してくれといった。そのとおりに舎利弗と目連を上首とする比丘サンガは (*SāriputtaMahāmoggallānapamukho bhikkhusaṃgho*) 朝食をなさずしてヴェールカンタカにやってきたので、ナンダマター優婆夷は比丘サンガ (*bhikkhusaṃgha*) を招待した。舎利弗と目連を上首とする比丘サンガは (*SāriputtaMahāmoggallānapamukho bhikkhusaṃgho*) ナンダマター優婆夷の住所に行き、行って設けられた座についた。その時ナンダマター優婆夷は舎利弗と目連を上首とする比丘サンガに (*SāriputtaMahāmoggallānapamukhaṃ bhikkhusaṃgham*) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。AN.007-005-050 (vol.IV p.063)

〈4〉ある時世尊は、舎衛城のジェータ林の給孤独園に住されていた。その時、ヤソージャを上首とする500人の比丘たちは (*Yasojapamukhāni pañcamattāni bhikkhusatāni*) 世尊に会うために舎衛城にやってきて、新来比丘たちは旧住比丘たちと (*āgantukā bhikkhū nevāsikehi bhikkhūhi saddhiṃ*) 挨拶を交わして騒がしかった。世尊は「漁師が魚を引き上げるときのように騒がしい、比丘らよ去れ、私はあなたたちを放逐する、私のそばに住んではならない」と叱って去らしめた。比丘らはヴァッジの人々の中を遊行してヴァグムダー河 (*Vaggumudā nadi*) に近づき、河の畔りに草屋を作って雨安居に入った (*paṇṇakutiyo karitvā vassaṃ upagacchiṃsu*)。そのとき、尊者ヤソージャは比丘たちに (*bhikkhū*) 告げて言った、「友らよ、世尊は私たちの利益のため、利便のために、同情して私たちを放逐されたのである。世尊が私たちの居住を喜ばれるよう、私たちは住居を準備しよう」と。このようにして比丘たちは遠離し、不放逸にして専心に住し、その雨安居の間に皆悉く三明を得た。Udāna 003-003 (p.024)

〈5〉……このようにヤソーヴァティーを上首とする一万の比丘尼たちは (*Yasovati pamukhāni dasabhikkhunī saḥassāni*) 世尊の面前においてこれらの偈を唱えた。

Apadāna 04-03-029 (p.592)

〈6〉ヤソーダラーを上首とする一万八千の釈迦族生れの比丘尼たちは (*atthārasasahassāni*

bhikkhuni Sakyasambhavā Yasodharī-pamukhāni 等覚者のもとに近づいた。すべて大神通力があった (*sabbā honti mahiddhikā*) 一万八千は、牟尼のみ足に敬礼して力に応じて告げた。……このようにヤソーダラーを上首とする一万八千の比丘尼たちは (Yasodharā pamukhāni atthārasabhikkhuni sahasāni) これらの偈を唱えた。

*Apadāna 04-03-030* (p.596)

〈7〉……このようにヤサヴァティーを上首とする一万八千のクシャトリヤの童女比丘尼たちは (Yasavatī pamukhāni khattiyakaññā bhikkhuniyo atthārasasahasāni) 世尊の面前においてこれらの偈を唱えた。 *Apadāna 04-03-031* (p.597)

〈8〉そのときアッサジとプナッバスカという名のキターギリを住処にする無恥の悪比丘があった (*Assajipunabbasukā nāma Kiṭṭāgirismim āvāsikā honti alajjino pāpabhikkhū*)。彼等は自ら木を植えたり、人に教えて植えめたりなどの非行を行った。そのとき一人の比丘がカーシにおいて雨安居を過ごし、世尊に会うために舎衛城に行こうとして、キターギリを通りかかった。一人の優婆塞がこの比丘にアッサジとプナッバスカらが非行を行っていることを世尊に伝えるよう頼んだ。この比丘は舎衛城に到着し、この事を世尊に伝えた。世尊はこれが事実であることを確認されてから、舍利弗・目連に告げて言われた、「行け、舍利弗らよ、キターギリに行きアッサジ・プナッバスカの徒の比丘等にキターギリからの驅出羯磨を行いなさい。彼等はあなたがたの共住弟子である (tumhākaṃ ete saddhivihāriṇo)」<sup>(1)</sup>と。舍利弗らは「私たちはどのようにしてアッサジ・プナッバスカの徒の比丘らにキターギリからの驅出羯磨を行いましょうか。あの比丘らは暴戻兇悪です」と尋ねた。世尊は「舍利弗らよ、それならば多くの比丘とともに (bahukehi bhikkhūhi saddhim) 行きなさい」と答えられた。そこで舍利弗と目連を上首とする比丘サンガは (SāriputtaMoggallānapamukho bhikkhusaṃgho) キターギリに行き、アッサジ、プナッバスカの徒の比丘等にキターギリからの驅出羯磨を行ない、「アッサジ、プナッバスカの徒の比丘等はキターギリに住してはならない」と言った。

*Vinaya* 「羯磨鍵度」 (vol. II p.009)

(1) ‘saddhivihārin’ 戒を受けた和尚の弟子のことで、アッサジ・プナッバスカからはそれぞれ舍利弗か目連の弟子であったのであろう。

〈9〉同前。 *Vinaya Saṃghādisesa 013* (vol. III p.179)

[2] 仏弟子のだれかを「上首とする」とダイレクトに表現するパーリ聖典の用例は以上のみである。しかもそれを「サンガ」とするのは〈2〉〈3〉〈8〉〈9〉のみで、その上首は舍利弗・目連のみである。しかし〈1〉には「サンガ」という言葉は用いられていないが、「舍利弗・目連を上首とする500人の比丘たち」とするから、これも同様の用例と見なしてよいであろう。

ということになれば〈4〉もヤソージャと共にいたのは「500人の比丘たち」とするから、これもその用例と見なしうるし、〈5〉の「ヤソーヴァティーを上首とする一万の比丘尼たち」、〈6〉の「ヤソーダラーを上首とする一万八千の釈迦族生れの比丘尼たち」、〈7〉の「ヤサヴァティーを上首とする一万八千のクシャトリヤの童女比丘尼たち」も同様ということになる。

[2-1] このように指導者的な位置にある仏弟子とともに何百人からの比丘たちが共にいたとか、大比丘サンガと一緒にあったなどというのも、「仏弟子を上首とするサンガ」と見なすことができるとするならば、これには次のような用例が見いだされる。

次は共にいた比丘あるいは比丘尼たちを「サンガ」とする表現するケースである。資料番号は前項から続ける。以下には指導者的な位置にある者の名とサンガであることを示す語句にアンダーラインを付す。

- 〈10〉その時、具寿摩訶迦葉はパーヴァーよりクシナーラーに至る大道を、500人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ pañcamattehi bhikkhu-satehi) 進んでいた。そのとき具寿摩訶迦葉は、道より退いて一樹下に坐した。その時、一人の邪命外道がクシナーラーより曼陀羅華を持って、パーヴァーに至る大道を進んできた。具寿摩訶迦葉は、向こうから邪命外道のやって来るを見て言った。「友よ、我等の教主を知っていますか」と。彼は「はい、友よ、私は知っています。今日より七日以前に、沙門ゴータマは般涅槃に入られました。だから私はこの曼陀羅華を持っているのです」と答えた。*DN.016 Mahāparinibbāna-s.* (大般涅槃經 vol. II p.162)
- 〈11〉ある時、尊者クマラーカッサパは 500人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ pañca-mattehi bhikkhu-satehi) コーサラの人々の間を遊行して、セータヴァヤーと称するコーサラの町に行き、その北方のシンサバー林に住した。その時、王族パーヤーシはセータヴァヤーに居住していた。この町はコーサラ国王パセーナディより授けられた浄施の拝領地であった。*DN.023 Pāyāsi-s.* (弊宿經 vol. II p.316)
- 〈12〉あるとき世尊は王舎城竹林迦蘭陀園に住されていた。その時具寿舍利弗は 大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ) 南山に遊行した。舍利弗は随意の間南山に住し、それから王舎城に向けて遊行した。王舎城において舍利弗はダーナンジャーニ・バラモンと会い、彼のために法を説いた。*MN.097 Dhānañjāni-s.* (陀然經 vol. II p.184)
- 〈13〉その時具寿阿難は、大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ) 南山に遊行した。時に阿難の 30人ほどの共住弟子の比丘たちは (tiṃsamattā saddhivihārino bhikkhū)、学を捨てて還俗し、全く童子のみとなった。遊行から帰った阿難は王舎城の竹林栗鼠養餌所にいる摩訶迦葉を訪ねた。摩訶迦葉は「なぜ行儀の伴わない年少比丘とともに遊行するのか。友阿難よ、あなたの年少の徒衆は破壊した (olujjati te parisā)、あなたの徒衆は壊滅した (palujjati te navappāyā)。この童子は量を知らない (na vāyaṃ kumārako mattam aññāsi) 」と非難した。阿難は「頭に白髪が生えた者 (sirasmiṃ phalitāni jātāni) を童子という言葉 (kumārakavāda) をもって咎めるのですか」と反論した。これを聞いていたトゥッラナンダー (Thullanandā) 比丘尼は「どうしてかつて外道であった (aññatitthiyapubba) 摩訶迦葉はヴィデーハの聖者なる (vedehamuni) 尊者阿難を童子という言葉をもって咎めるのか」と迦葉を非難した。*SN.016-011* (vol. II p.217)
- 〈14〉ある時、世尊は舎衛城のジェータ林の給孤独園に住しておられた。その時、舍利弗はマガダのナーラ村に住し、重病に罹っていた。チュンダ沙弥 (Cunda samaṇuddesa)



が舍利弗の侍者であった。そのとき具寿舍利弗はその病気によって般涅槃した (parinibbāyi)。チュンダ沙弥はこれを阿難に報告し、二人で世尊のところに行った。阿難が舍利弗が般涅槃したと聞いたとき、身体が酒に酔ったように、あたりが真っ暗になって、ものが見えませんでしたと言ったので、世尊は「阿難よ、舍利弗は戒・定・慧・解脱・解脱知見蘊を取って般涅槃したのか」と尋ねられた。阿難が「そうではありません。しかし具寿舍利弗は私を教誡して下さり、渡して下さり、教授して下さるなどしていただきました。だから具寿舍利弗を憶念するのです」と答えると、次のように説法された。一切は滅するもので、例えばしっかりとした大樹が立っていても、大きな枝が先に破壊するように、しっかりとした大比丘サンガが立っていても (mahato bhikkhusamghassa titthato sāravato) 舍利弗は般涅槃する。作られたものに常なるものではなく、一切は滅する。だから自らを島とし、自らを抛り所とし、他を抛り所とせず、法を島とし、法を抛り所とし、他を抛り所とせずに住しなさい、と。SN.047-013 (vol. V p.161)

〈15〉そのとき摩訶迦葉は比丘たちに告げて言った。あるとき、私は 500 人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim pañcamattehi bhikkhusatehi) パーヴァーとクシナーラーの間の道におりました。そのとき私たちは、世尊が亡くなったことを知りました。未だ離欲していない比丘たちは「善逝が般涅槃されるのがどうしてこんなにも早いのか、世間の眼が滅されることがどうしてこんなにも早いのか」と嘆きました。すでに離欲している比丘たちは正念正知にしてこれを耐え忍びました、「諸行は無常である、どうして〔常なることを〕得ようか」と。その時、スバツダと名づける老年出家者があり、彼は「友等よ (āvuso)、憂える必要はない、私たちがあの沙門より脱することができたのはよい、これは適法、これは不適法と私たちを悩ました。今や私たちはもし欲すればなし、欲しなければなさないようにしよう」と言いました。Vinaya「五百犍度」(vol. II p.284)

〈16〉時に、具寿摩訶迦葉はサンガに表白した (samgham nāpesi)。「サンガは、私の話を聞け (suṇātu me āvuso samgho)。もしサンガに機が熟したならば (yādi samghassa pattakallam)、サンガはこの五百比丘を選んで (samgho imāni pañca bhikkhusatāni sammanneya) 王舎城において雨安居に住して法と律とを結集せしめ、余の比丘等をして王舎城において雨安居に住することがないようにしよう」と。そしてサンガはこれを白二羯磨によって承認した。Vinaya「五百犍度」(vol. II p.285)

〈17〉長老比丘たちによって (therehi bhikkhūhi) 法と律とが結集されていた時、具寿プラーナは 500 人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim pañcamattehi bhikkhusatehi) 南山に遊行していた。随意の間南山に住した後、プラーナは王舎城竹林迦蘭陀園の長老比丘等のもとに行った。長老比丘たちは具寿プラーナに言った。「友プラーナよ (āvuso Purāṇa)、長老たちによって法と律が結集された、この結集を受けよ (opehi taṃ samgītiṃ)」と。プラーナは、「友等よ (āvuso)、長老たちによって法と律がよく結集されました。けれども私は世尊の現前に聞き現前に受けたように保持していきます」と言った。Vinaya「五百犍度」(vol. II p.289)

〈18〉時に、具寿阿難は長老比丘たちに (there bhikkhū) 言った。「世尊が般涅槃される

ときに、私に言われました。『サンガは (saṃgho) 私の滅後にチャンナ比丘に梵壇を命じなさい』と。梵壇というのは、チャンナが比丘等にその欲する如く語ったとしても、比丘等はチャンナ比丘に語ってはならない、教導してはならない、教誡してはならないということです」と。そこで長老比丘たちは「それでは友阿難よ (āvuso Ānanda)、あなた自身がチャンナ比丘に梵壇を命じなさい」と言った。阿難は「大徳らよ、私はどのようにチャンナ比丘に梵壇を命じましょうか、あの比丘は暴戾麤悪です」といった。長老比丘たちは「友阿難よ、それならば多くの比丘とともに (bahukehi bhikkhūhi saddhim) 行きなさい」と言った。そこで阿難は 500 人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhim pañcamattehi bhikkhusatehi) <sup>(1)</sup> 流れを上る船に乗ってコーサンビーで降り、ウデーナ王の園に近い一樹下に坐った。Vinaya 「五百韃度」 (vol. II p.290)

(1) 「上首とする」としないけれども、(8) の駆出羯磨の際の状況とよく似ている。

〈19〉あるとき世尊は舎衛城のジェータ林の給孤独園に住しておられた。その時世尊は「私は3ヶ月間独坐したいから、一人の食事を運ぶ者 (piṇḍapātanihāraka) を除き、誰も私のところに近づいてはならない」といわれた。そこで舎衛城のサンガは「もし世尊に近づいたら波逸提の罪に処す」という規則を作った (katikā katā hoti)。そのときウパセーナ・ヴァンガンタプッタ (Upaseno Vaṅgantaputto) は、衆を率いて (sapariso) 世尊のもとに到り、世尊を礼して一方に坐った。客比丘に親しく挨拶するのは諸仏の常法であったから、世尊は挨拶をされ、一人のウパセーナの弟子比丘 (saddhivihārika bhikkhu) に「あなたは糞掃衣を喜んで着ているのですか」と尋ねられた。その比丘は「いいえ、喜んで着ているではありません」と答えた。そこでさらに世尊は「どうしてあなたは糞掃衣者なのですか」と尋ねられた。比丘は「和尚 (upajjhāya) が糞掃衣者だからです。だから私も糞掃衣者なのです」と答えた。そこで世尊はウパセーナに「あなたのこの徒衆 (parisā) は清らかな心 (pāsādikā) をもっている。あなたはどのように徒衆を指導している (vineti) のですか」と尋ねられた。ウパセーナは「具足戒を求める者に、私は阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者である。もしあなたも阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者でありたいなら具足戒を与えましょう、といます。もし承知すれば私は具足戒を与え、もし承知しないならば具足戒を与えません。依止を求める者 (yo maṃ nissayaṃ yācati) にも同様にしています」と答えた。世尊は善哉善哉と褒められ、ウパセーナにさらに「あなたは舎衛城のサンガの規則を知っていますか」と尋ねられた。ウパセーナは知らないと答え、さらに「私たちは世尊が制定されないものを制定せず、制定されたものは廃しません。制定された学処を守っていきます」といった。世尊は「制定されないものを制定するべきではないし、制定されたものは廃すべきではない。制定された学処は守られるべきである。阿蘭若住者、乞食行者、糞掃衣者は私に会いたいならば随意に来ることを許す」と説かれた。Vinaya Nissaggiya 015 (vol. III p.230)

このうち〈19〉の文章の形式はかなり他のものと異なるが、内容によってこれも資料の一つとなりうると考えたものである。

[2-2] 次は共にいた比丘あるいは比丘尼たちを「サンガ」とせず、単に「比丘たち」

「比丘尼たち」としかしないケースである。資料の番号は前項に続ける。

〈20〉あるとき世尊はコーサンビー、ゴーシタ園に住されていた。その時遊行者サンダカ<sup>(1)</sup>は (*Sandako paribbājako*) 500 人の遊行者たちからなる遊行者の大衆とともに (*mahatiyā paribbājakaparisāya saddhim pañcamattehi paribbājakasatehi*) ピラッカ窟 (*Pilakkha guhā*) に住していた。時に阿難は夕刻独座より起って、比丘たちに言った。「友らよ (*āvuso*)、私たちは石窟を見るためにデーヴァカタソッパ (*Devakaṭasobbha* 天作溝) に行こう」と。比丘たちは「そうしましょう、友よ (*evam āvuso*)」と同意した。そうして具寿阿難は多くの比丘たちとともに (*sambahulehi bhikkhūni saddhim*) デーヴァカタソッパに行った。MN.076 *Sandaka-s.* (サンダカ経 vol. I p.513)

(1) サンダカも同じような表現をされているけれども、これは邪命外道の遊行者である。そしてその集団は *parisā* と表現されている。

〈21〉あるとき世尊は釈迦国のカピラヴァットゥ・ニグローダ園に住されていた。この時、具寿阿難は多くの比丘たちとともに (*sambahulehi bhikkhūni saddhim*) ガターヤ釋種 (*Ghaṭṭāya-sakka*) の家で作衣をなしていた。夕方世尊は独座から起って、このガターヤ釋種の家に来られ、設けの座につかれた。そして世尊は阿難に話しかけられた。「阿難よ、カーラケーマカ釋種 (*Kālakhemaka sakka*) の家に多くの床座が設けられている。そこに多くの比丘らが住しているのですか」と。阿難は「世尊よ、カーラケーマカ釋種の家には多くの床座が設けられており、そこに多くの比丘らが住しています。私たちの作衣の時 (*cīvarakāmasamaya*) が来ましたから」と答えた。世尊は「衆会を楽しみ (*saṃgaṇikārāma*)、衆会を喜び (*saṃgaṇikārata*)、衆会に満足し (*saṃgaṇikārāmata*)、群れを楽しみ (*gaṇārāma*)、群れを喜び (*gaṇarata*)、群れに喜悅する (*gaṇasammudita*) ことを専らとする比丘は輝かない、……」と説かれた。MN.122 *Mahāsuññata-s.* (空大経 vol. III p.109)

〈22〉ある時、世尊は舍衛城のジェータ林の給孤独園に住されていた。そのときゴータミー・マハーパジャーパティは 500 人の比丘尼たちと共に (*pañcamattehi bhikkhunīsatehi*) 世尊の所に行き、「世尊は、諸の比丘尼たちに教誡してください。教えをたれて下さい。説法をしてください」と願い出た。そこで諸の長老比丘は (*therā bhikkhū*) 順次に比丘尼たちに教誡した。MN.146 *Nandakovāda-s.* (教難陀迦経 vol. III p.270)

〈23〉世尊は王舎城の靈鷲山に住しておられた。そのとき具寿舍利弗は多くの比丘たちと共に (*sambahulehi bhikkhūni saddhim*)、釈尊からほど遠からぬところを經行していた。具寿大目犍連は多くの比丘たちと共に (*sambahulehi bhikkhūni saddhim*) ……。具寿大迦葉は多くの比丘たちと共に (*sambahulehi bhikkhūni saddhim*) ……。具寿アヌルッダは多くの比丘たちと共に (*sambahulehi bhikkhūni saddhim*) ……。具寿ブンナ・マントーニプッタは多くの比丘たちと共に (*sambahulehi bhikkhūni saddhim*) ……。具寿ウパーリは多くの比丘たちと共に (*sambahulehi bhikkhūni saddhim*) ……。具寿阿難は多くの比丘たちと共に (*sambahulehi bhikkhūni saddhim*) ……。提婆達多も多くの比丘たちと共に (*sambahulehi bhikkhūni saddhim*) ……。そのとき釈尊は比丘たちに告げられた。「見なさい、舍利弗は多くの比丘たちとともに (*sambahulehi*

bhikkhūhi saddhim) 遊行している。これらの比丘たちはみな大慧の者 (sabbe kho ete bhikkhū mahāpaññā) である」と。……「目連の比丘たちはみな大神通の者 (mahiddhika) である」。……「摩訶迦葉の比丘たちはみな頭陀説の者 (dhutavāda) である」。……「阿那律の比丘たちはみな天眼者 (dibbacakkhuka) である」。……「プンナの比丘たちはみな説法者 (dhammakathika) である」。……「ウパーリの比丘たちはみな持律者 (vinayadhara) である」。……「阿難の比丘たちはみな多聞 (bahussuta) である」。……「提婆達多の比丘たちはみな有罪者 (pāpiccha) である」として、衆生は性質によって (dhātuto) 合流し (saṃsandanti)、集合する (samenti) と説かれた。SN.014-015 (vol. II p.155)

〈24〉ある時具寿舎利弗は王舎城の靈鷲山に住していた。その時具寿舎利弗は多くの比丘たちと共に (sambahulehi bhikkhūhi saddhim) 靈鷲山から下りつつ、大きな木材の聚りを見て、比丘らに言った。「友らよ (āvuso)、あなたたちはあの大きな木材の聚りを見るか」と。比丘らは「はい見ます、友よと (evam āvuso)」と答えた。舎利弗は「神通を具え、心自在を得た比丘は、欲するならば、この木材の聚りをただ地と信解することができる (dārukkhandhaṃ paṭhavī tveva adhimucceyya)。なぜか。あの木材の聚りの中に地界があり、それによって神通を具え、心自在を得た比丘はかの木材の聚りをただ地と信解することができるのである」と説いた。AN.006-004-041 (vol. III p.340)

〈25〉ある時世間光、人御者はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住されていた。その時勝者の母の妹マハーゴータミー比丘尼はその楽しき城の比丘尼住所に解脱した 500 人の比丘尼たちと共に (bhikkhunīhi vimuttāhi satehi saha pañcahi) 住んだ。そのとき彼女の心に、「仏の般涅槃も、一雙の最上弟子や、またラーフラ・阿難・ナンダの〔涅槃をも〕私は見るできないであろう。私は世主、大仙の許しを得て、寿命行を捨てて寂靜に行こう」という思いが生じた。このような思いは五百の比丘尼らにも、ケーマラーにもあった。その時地震があり、天の鼓が鳴り、比丘尼住処に住んでいる諸の天が涙を流した。一切の比丘尼たちはゴータミーのもとに行き、「聖尼よ (ayya)、山もろともに大地が動き、天の鼓が鳴り、泣き声が聞こえました。どういうわけでしょうか」と尋ねた。…… Apadāna 04-02-017 (p.529)

〈26〉(ヤソーダラー比丘尼は) 大神通があり、大慧がある五百の比丘尼たちを従えて (purakkhatā bhikkhunīhi satehi saha pañcahi mahiddhikā mahāpaññā)、等覚者のもとに行き、等覚者に「私の最後〔有〕は転じて 78 年となりました。私は少ない生命を捨てて (paritta mama jīvitam pahāya)、自らの帰依所に行き、今夜寂滅を得たいと思います、……」と言った。Apadāna 04-03-028 (p.584)

〈27〉世尊は「サンガは提婆達多のために王舎城において顕示羯磨をなせ (saṃgho Devadattassa Rājagahe pakāsanīyakammaṃ karotu)。提婆達多の以前の本性と今の本性は異なる (pubbe Devadattassa aññā pakati ahosi idāni aññā pakati)。提婆達多が身・語によってなすところのものによって仏・法・僧は見られるべきではない、提婆達多のみが見られるべきである (yaṃ Devadatto kareyya kāyena vācāya na tena buddho vā dhammo vā saṃgho vā daṭṭhabbo, Devadatto 'va tena daṭṭhabbo)」と

言われた。そしてそれをサンガが白二羯磨によって決定すべきことを指示され、舍利弗に「あなたが提婆達多を王舎城において顕示せよ」と命じられた。舍利弗は「以前、私は提婆達多に対して王舎城においてゴードイプッタは大神通・大威力の持ち主だと讃歎しました (pubbe mayā bhante Devadattassa Rājagahe vaṇṇo bhāsito mahiddhiko Godhiputto mahānubhāvo Godhiputto)。私はどのように提婆達多のために顕示しましょうか」と質問した。そこで世尊は白二羯磨によって舍利弗を選ぶことを指示された。選ばれた舍利弗は王舎城において、先の通りに提婆達多を顕示した。無信の人々は「この沙門釈子らは提婆達多を嫉妬しているのだ」と言い、有信の人々は「これはただ事ではない、世尊が王舎城において提婆達多を顕示されるとは」と言った。Vinaya「破僧健度」(vol. II p.189)

〈28〉その日は布薩であった。提婆達多は五事を持して住する者は籌を取れと言い、ヴェーサーリーのヴァッジ族出身の新参の比丘500人 (Vesālikā Vajjiputtakā pañcamattāni bhikkhusatāni navakā) がこれ法なり、これ律なり、これ師の教えなりと思って籌を取った。提婆達多はサンガを破し (saṃghaṃ bhinditvā)、500人の比丘を引き連れて (pañcamattāni bhikkhusatāni ādāya) ガヤーシーサ (Gayāsisa) に去った。世尊は舍利弗・目連に彼らを連れ戻すように命じられた。その時、提婆達多は大衆に圍繞せられて (mahatīyā parisāya parivuto) 法を説いて坐していた。提婆達多は舍利弗・目連を喜んで迎え、舍利弗に半座を分かって招いた (upaḍḍhāsanena nimantesi)。舍利弗・目連は一の座をとって坐った。提婆達多は説法に疲れたと、舍利弗に説法をまかせて右脇して眠った。Vinaya「破僧健度」(vol. II p.198)

このうち〈27〉と〈28〉は他の用例の文脈と異なるが、内容としてはこれもこの一群の資料に加えるものと考えた。

[3] 以上が「仏弟子の誰かを上首とするサンガ」、ないしは「仏弟子の誰かを指導者とするサンガ」と考える資料である。

[3-1] ここでは厳密を期するために、仏弟子の誰かを「上首とするサンガ」ないしは「上首とする集団」と明言する資料と、「上首」とはしないが指導的役割を担う仏弟子の誰かが「サンガ」とともにいたと表現される資料と、さらにはこの指導的役割を担う仏弟子の誰かが多くの比丘あるいは比丘尼と共にいたとする資料と、3種類に分けて紹介した。

しかし例えば〈18〉は、阿難がチャンナに梵壇を命じるために「500人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに」コーサンビーへ向かったとするのみであるが、〈8〉〈9〉はアッサジ、プナッバスカの徒の比丘等にキターギリからの驅出羯磨を行なうというもので、ここでは「舍利弗と目連を上首とする比丘サンガ」がキターギリに行ったと表現されている。あるいは〈18〉の場合は、「500人の比丘たち」は結集に参加した「長老比丘」たちとも考えられなくはないが、「多くの比丘たちと一緒にいけ」と命じたのはその長老比丘たちであるから、この阿難に同行した500人の比丘は長老比丘とは異なる、阿難の弟子たちであったであろう。このように〈18〉と〈8〉〈9〉は同じようなシチュエーションであって、だから単に「阿難が500人の比丘たちと共に」というのも、「舍利弗と目連を上首とする比丘サンガ」として「上首」という言葉を使うのも、内実においては相違がないものと考えられる。

また〈23〉は舍利弗・目連・摩訶迦葉・アヌルッダ・ウパーリ・阿難など十大比丘と称されるような仏弟子たちが「多くの比丘たちと共に経行していた」とするのみで、「上首とするサンガ」とも「大比丘サンガ」とも表現されていないが、内容から言えばこれも「舍利弗と目連を上首とする比丘サンガ」などと相違のないものと考えて差し支えないであろう。したがってこの3種類の資料を「仏弟子を上首とするサンガ」資料の範疇にあるものとして、同等に扱うことにする。

[3-2] ただし先に紹介した資料はかなり幅広く集めたので、あるいはこの中に含めることは不都合というものも含まれているかも知れない。

例えば〈14〉は、大樹と大きな枝のたとえが説かれる経であるが、ここでいわれる「大比丘サンガ」を「舍利弗を上首とする大比丘サンガ」と理解したのであるが、あるいはこれは「釈尊のサンガ」をさし、「釈尊のサンガ」は舍利弗という大きな枝が先に壊しても存続するというを表すのかも知れない。しかし一連の「釈尊のサンガ」の存在を追及してきた経緯から言うと、その可能性も否定することはできないが、しかしこれは「舍利弗を上首とするサンガ」がたとえ舍利弗という大きな枝が壊したとしても、そのサンガは確固として残るといふふうに理解すべきであろうと判断したのである。

[3-3] またここには明らかに性格の異なるサンガが含まれていることも指摘しておかなければならない。資料〈16〉は第1結集の記事であって、摩訶迦葉は確かに選ばれた500人の長老比丘たちからなるサンガのリーダー的な位置についてのもと考えられるが、このサンガは資料〈15〉のいう、摩訶迦葉がパーヴァーからクシナーラーに向かっていたときに共にいた「500人の比丘たちからなる大比丘サンガ」とは異なるであろう。このサンガはまさしく摩訶迦葉が指導者であって、他の500人はその弟子であったであろうからである。

そしてもちろんここで取り扱おうとしている「仏弟子を上首とするサンガ」は、この資料〈15〉のようなサンガのことである。

[4] それではここで取り扱う「仏弟子を上首とするサンガ」とは具体的にはどのようなサンガを言うのであろうか。

[4-1] 資料〈19〉はウパセーナが衆を率いて (*sapariso*) 三月独坐に入られた世尊を訪ねて行き、彼らが阿蘭若住者・乞食行者・糞掃衣者であることを褒められたという経である。この集団は明らかにウパセーナが和尚 (*upajjhāya*) であり、阿闍梨 (*ācariya*) であって、彼に率いられる比丘たちは明らかに共住弟子 (*saddhivihārin*) であり、内住弟子 (*antevāsaka*) である。

「律蔵」に定められた正式の具足戒は、釈尊のみがもつ特権的な「善来比丘具足戒」を別にすれば、「十衆白四羯磨具足戒」であり、特例として辺国では「五衆白四羯磨具足戒」が認められている。これらは十人あるいは五人以上の授戒に関わることができる資格を持った比丘たちが律の規定にしたがって、合議してサンガへの入団を許可するのであるが、その規則の一つが出家具足戒を望む者は必ず指導者としての和尚を決め、その弟子とならなければならないということである。それが和尚と共住弟子の関係であって、その弟子が特別に優秀でないかぎり最低10年間は独立が許されず、住み込み徒弟として和尚に奉侍し、和尚はこの弟子の生活万般の面倒を見なければならない。

しかし10年たたない間に、和尚が亡くなるとか還俗するなどの特別の事情があって、和尚がいなくなった場合は、この和尚の代わりに誰か別の指導者を求めなければならない。この関係が阿闍梨と内住弟子である。

資料〈19〉においてウパセーナが「具足戒を求める者に、私は阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者である。もしあなたも阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者でありたいなら具足戒を与えましょう、といいます。もし承知すれば私は具足戒を与え、もし承知しないならば具足戒を与えません。依止を求める者にも同様にしています」というのは、自分が和尚となると、あるいは阿闍梨となると、共住弟子あるいは内住弟子に阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者であることを承知させるということの意味する。そしてウパセーナのサンガは、このような条件を承諾した共住弟子や内住弟子たちから成り立っていたのである。

[4-2] この和尚あるいは阿闍梨と弟子の関係は、〈8〉〈9〉資料にも、〈13〉資料にも現れている。資料〈13〉は阿難が大比丘サンガとともに南山に遊行する間に、30人ほどの共住弟子の比丘たち (*tiṃsamattā saddhivihāriṇo bhikkhū*) が還俗してしまったというものである。これはその時点でもまだ「共住」していたわけであるが、〈8〉〈9〉資料はキターギリの悪比丘を駆出する羯磨の執行者として舍利弗・目連を派遣するときに、世尊は「行け、舍利弗らよ、キターギリに行きアッサジ・プナッバスカの徒の比丘等にキターギリからの驅出羯磨を行いなさい。彼等はあなたがたの共住弟子である (*tumhākaṃ ete saddhivihāriṇo*) 」といわれたとされているから、かつての共住弟子はすでに独立していたのである。しかしこの関係は一生涯続くから、世尊はすでに独立している悪比丘たちに対する驅出羯磨の執行の役割を、舍利弗たちに命じたのである。

しかしこのように独立することもあったであろうが、10年間を経過して一人前の比丘となった後も、昔と同じ和尚のもとで一つのサンガを形成するということが多かったであろう。500人というのは大袈裟であるが、このような大勢の共住弟子を一人の和尚が指導するのは無理であって、また決して勤められることではない。そこで500人も大比丘サンガはこの親子に比される初代の和尚の共住弟子が、一人前になってその弟子を取り、さらにその弟子がまた弟子を取るというふうには、あたかもインドの大家族のように、何世代もの和尚と共住弟子、阿闍梨と内住弟子が集まって形成されたものと考えられる。しかし大家族の族長は一人であるように、このサンガのおおもともまた一人の、いわば大和尚というべき人物であって、ウパセーナのようにそのサンガ全体を指導・統制していたのである。

なおこのサンガは建前としては閉ざされた集団ではなく開かれた集団であって、出るのも自由、入るのも自由であって、特に布薩などのサンガ行事には旅の途中の出家修行者も参加しなければならないことになっていた。しかし資料〈1〉や〈4〉に描かれているように、そこには「旧住比丘」と「客来比丘」という区別があり、日常的にはこの「旧住比丘」や「客来比丘」はひとかたまりになって行動していたのであって、おそらくそれほど活発な流動があったわけではなかったものと考えられる。また正式にこの組織に入るためには、ウパセーナが入団の条件を示してそれを承知させたように、「サンガの上首」の許可も必要としたであろう。サンガは和合しているがゆえに「サンガ」であって、この「和合」がサンガ運営の最大の理念であり、この和合を保つうえでも、このような管理は必要であったであろうと考

えられる。

[4-3] 「仏弟子を上首とするサンガ」とは上記のようなサンガであったとすると、結集の際に選ばれた500人の長老比丘からなる資料〈16〉のサンガは、ここから除外されるべきであろう。

[5] さて、上記のように規定する「仏弟子を上首とするサンガ」とこれに類する資料を、いくつかの視点から整理してみよう。

[5-1] まず「上首」とされ、「指導者」と目される仏弟子は次のとおりである。

舍利弗・目連：〈1〉〈2〉〈3〉〈8〉〈9〉

舍利弗：〈12〉〈14〉〈23〉〈24〉〈27〉

目連：〈23〉

摩訶迦葉：〈10〉〈15〉〈16〉〈23〉

クマーラカッサパ：〈11〉

阿難：〈13〉〈18〉〈20〉〈21〉〈23〉

プラーナ：〈17〉

ウパセーナ・ヴァンガンタプッタ：〈19〉

ヤソージャ：〈4〉

アヌルッダ：〈23〉

ブンナ・マンターニプッタ：〈23〉

ウパーリ：〈23〉

提婆達多：〈23〉〈28〉

ヤソダラー（比丘尼）：〈5〉〈6〉〈26〉

ヤサーヴァティー（比丘尼）：〈7〉

マハーパジャーパティー・ゴータミー（比丘尼）：〈22〉〈25〉

[5-2] またこれら仏弟子たちが共にいたとされる集団がどのように表現されているかを調査してみると次のようになる。

比丘サンガ：〈2〉〈8〉〈9〉

大比丘サンガ：〈3〉〈12〉〈13〉〈14〉

500人の比丘たちからなる大比丘サンガ：〈10〉〈11〉〈15〉〈17〉〈18〉

500人の比丘たち：〈1〉〈4〉〈16〉〈28〉

多くの比丘たち：〈20〉〈21〉〈23〉〈24〉〈27〉

衆を率いて：〈19〉

500人の比丘尼たち：〈22〉〈25〉〈26〉

1万人の比丘尼たち：〈5〉

1万8千人の比丘尼たち：〈6〉〈7〉

[5-3] 次にこれらの仏弟子の誰かを指導者とする集団が、何をしたかということ調査してみると次のようになる。

遊行：〈1〉〈3〉〈4〉〈10〉〈11〉〈12〉〈13〉〈15〉〈17〉〈18〉〈19〉〈20〉

聚落・園林に住す：〈14〉〈25〉



作衣：〈21〉  
遊行して駆出羯磨を執行：〈8〉 〈9〉  
顕示羯磨を執行：〈27〉  
食事に招待される：〈3〉  
六支具足を布施される：〈2〉  
世尊に挨拶：〈5〉 〈6〉 〈7〉 〈22〉 〈26〉  
経行：〈23〉  
説法：〈24〉 〈28〉

[6] 以上の整理をもとに若干の考察を施しておきたい。

[6-1] まずこれら「仏弟子を上首」とし、「仏弟子を指導者」とする集団は、「仏を上首とするサンガ」とその内容においてほとんど相違はないということが言えるであろう。例えば資料〈3〉は「舍利弗と目連を上首とするサンガ」がナンダマター優婆夷に食事を招待されるという状況が描かれているが、その前後の描写は「仏を上首とするサンガ」の招待の描写とほとんど同じである。また〈1〉と〈4〉は「仏を上首とするサンガ」と「仏弟子を上首とするサンガ」が一つに溶け合っ、一つのサンガを形成しているのであるから、この二つのサンガに質的な相違はないということの意味するであろう。

また人数は「仏を上首とするサンガ」の場合のように1,250人とか1,000人という大きな数字では表されないが、しかしながら500人とはされ、「大比丘サンガ」とされるのは同じである。

そもそも一般的に考えられている「サンガ」は仏弟子たちの集団であって、先に紹介したような500人とか、1,250人で構成される、仏弟子たちと同じようなレベルの「仏を上首とするサンガ」が存在したということ自体が、我々が想定していた範囲の外にあったといわなければならないであろう。

[6-2] そしてこの「仏弟子を上首とするサンガ」もまた「サンガ」と表現されるということは、これらが単に集団をさすのではなく、厳密な意味でのサンガであるということはいうまでもない。資料〈8〉〈9〉が駆出羯磨を行い、〈27〉が顕示羯磨を行い、また〈16〉〈18〉のサンガは選ばれた上座比丘から形成されるサンガであるから少し特異なサンガではあるが、それでも〈16〉が結集を行い、〈18〉が梵壇を行おうとしたのも、すべてサンガの行事としての羯磨として行ったのであって、この羯磨を行いうるというのがもっとも厳密なサンガの定義であるからである。

[6-3] そしてこの集団をもとに日常生活がなされていたことは、これらを単位として遊行や経行が行われ、食事に招待されたりするところに明らかである。

[7] 上の資料から明らかなように、パーリ聖典において彼らを上首としてサンガが形成されていたとされる仏弟子は、舍利弗・目連を初め摩訶迦葉・阿難など仏の十大弟子とされ、「具寿 (āyasmant)」と呼ばれる主立った弟子が多い。しかしその用例がそれほど多くないのは、聖典そのものが釈尊の行状記を残そうとしたものであるからであって、実際には釈尊在世中からすでに仏教は仏弟子たちによってインド各地に布教され、各地でたくさんの仏

弟子たちが活動していたのであって、聖典に名を残されていない名もなき仏弟子を「上首とするサンガ」がインド各地に、たくさん存在したものと考えられる。このように推定される理由を以下にあげてみよう。

[7-1] 釈尊は成道からそう遠くない時期に、鹿野苑の比丘たちに「遊行せよ、同じ道を二人していくな。法を説け、梵行を顕示せよ」と説かれて、諸国に布教に出された。しかし彼らが諸国から出家希望者を連れて帰ってくるということをくり返すうちに疲れ果てたので、そこで出先で彼ら自身が三宝帰依具足戒によって自分の弟子をとってよいと許されたことによって、「サンガの原形」が形成されたのであって、仏弟子を上首とするサンガは仏教布教の最初期からまさしく各地に存在したと考えられる。

[7-2] しかしこの制度では規律が保てないという弊害もでて、そこで「和尚と弟子」の制が定められ、弟子は和尚の元で10年間は修行しなければならないということになった。これをもとに「十衆白四羯磨具足戒」という正規の出家具足戒が制定されたのであって、このときに律蔵が規定する「サンガ」が成立したものと考えられる。要するにサンガはこのように仏弟子たる和尚と彼らの弟子という師弟関係が基本構造となっているのであって、これもまた釈尊の手を離れたところで、規律を保ちつつサンガが各地に散在することを前提としているのである。

[7-3] しかし地方では10人という具足戒を与えうる資格を有する出家者を揃えにくいということから、地方の特例として「五衆白四羯磨具足戒」が許されたのであって、これまたサンガがインド各地に散在していたことを明白に示している。

[7-4] また先に紹介した「第2論文」において述べたように、「四方からやって来る出家修行者を含むサンガ」が想定されなければならないのは、四方の各地に比丘らが存在し、これらの比丘たちは原則としてサンガのメンバーであり、そういったサンガが各地に存在していたという現実を物語っている。

[7-5] そしてそもそも「律蔵」の「犍度」に収められたサンガの運営に関する規定は、このような各地に存在するサンガが、釈尊の手を離れて、弟子たちのみで運営される必要があったがゆえに定められたものに外ならない。いわば「律蔵」に「犍度」があること自体が、インド各地にたくさんの「仏弟子を上首とするサンガ」が存在していたことを証明しているのである。

[8] ところでこのサンガの運営方法は、一般的には非常に民主的なものであったと考えられている。もっとも本論文においてはこれについて言及する余裕はなく、また別の論文を書くことにしているが、しかしおそらくそうではなかったというのが筆者の見解である。本資料の範囲内においてこれを証明すると考えられる記述を紹介しておく。

[8-1] そもそも「仏を上首とするサンガ」が民主的に運営されていたと考える者はいないであろう。律蔵の規定のすべては立法的機関があって、そこで合議をしたうえで制定されたのではなく、釈尊が独断的に制定された。そのような釈尊が指導するサンガが民主的に運営されていたとは考えられないからである。世尊の位置がどのようなものであったかは明らかではないけれども、資料〈27〉は王舎城のサンガが提婆達多を顕示羯磨にかけることも、舍利弗をその役割に選ぶことも、釈尊が命じて、形式的に白二羯磨によって決定されている

ことを見ても明らかである。

そして「仏弟子を上首とするサンガ」は質的に「仏を上首とするサンガ」と相違はないものであった。もしそうならこの「仏弟子を上首とするサンガ」も、必ずしも民主的に運営されたのではないということは容易に推測できる。

しかも先に考察したように、‘pamukha’という言葉は「指導者」「リーダー」という意を含む言葉として用いられ、しかも釈尊にも使われる言葉なのであるから、この‘pamukha’とよばれ、あるいはまた‘saṃghatthera’と呼ばれる者が指導するサンガが、その指導力を発揮せずに、民主的平等的に運営されたとは考えがたい。

サンガの中には衣を受納する係、衣を分配する係など、たくさんの役割を担当する者が決められており<sup>(1)</sup>、これは白二羯磨によって専任されるのであるが、しかしサンガのリーダーとなるべき者の選任規定はない。これはサンガそのものが上首となるべき大和尚を中心に、自然に形成されたものであるからであろう。

プーラナ・カッサパなどの六師外道の集団も等しくサンガとかガナと呼ばれているが、しかし彼らは「サンガの主 (saṃghin)」「ガナの主 (gaṇin)」「ガナの教師 (gaṇācariya)」と呼ばれていた<sup>(2)</sup>。‘-in’は所有を表す接尾辞であって、六師外道の集団が民主的に運営されていたということは考えにくいということも傍証となりうるであろう。

(1) 拙著『初期仏教教団の運営理念と実際』(国書刊行会 2000.12) p.059 参照

(2) DN.02 *Sāmaññaphala-sutta* (vol. I p.047 以下)

[8-2] 資料〈19〉は、ウパセーナがそのサンガの構成員に阿蘭若住者・乞食行者・糞掃衣者であることを要求していた。また〈23〉にはサンガ全体が、この上首とされる上座比丘の色に染まっていたことが描かれている。もちろん10年間の依止期間にある共住弟子や内住弟子は和尚・阿闍梨の命令は絶対服従に近かったであろうし、10年間の依止義務を終えた比丘であってサンガのリーダーと気心が通じない者は自然にこのサンガから離れることになって、自然にサンガの色はその指導者の色に染まっていったものと考えられる。そのようなサンガが民主的平等に運営されていたとは考えにくい。

[8-3] この「仏弟子を上首とするサンガ」は、例えば〈24〉では舍利弗が、そして〈28〉では提婆達多がサンガの構成員である比丘たちに法を説いている。このように法を説く立場の者と、法を聞く立場の者は基本的に異なるのであって、法を説くのはまさしく仏と同じような姿勢ということができようであろう。おそらく釈尊が舍利弗や目連に自分に代わって説法させたのも、そういう自覚があったからであろう。

また資料〈13〉では遊行の間に弟子たちを還俗させてしまった阿難が摩訶迦葉から非難されている。このように上首となる比丘の指導力が要請されていたのである。また〈8〉や〈9〉において、驅出羯磨を行うのはその和尚であった舍利弗や目連であるべきだとされているのも、その現れであるといえるであろう。

[8-4] しかしこの問題は重要であり、サンガ運営規則全体から論考されなければならない。したがって別の機会に改めて詳しく論じたい<sup>(1)</sup>。

(1) 「中村元選集 決定版」第5巻『インド史I』(春秋社 1997.3) p.329に、『マハーバーラタ』のガナの指導者 (saṃghamukhya, gaṇamukhya) のあるべき姿勢が紹介されている。

「ガナの指導者たちは特に尊敬されるべきである。世間の営みは大いに彼らに依存している。国の秘策を守ること(秘密にすること)とスパイを派遣することは、指導者たちのなすこと

である。ガナが全体として国の秘策を知ることはよろしくない。むしろガナの指導者たちは（秘密に）集合して協力してガナの利益をはかるべきである」

#### 【4】まとめ

以上、「仏を上首とするサンガ」「仏弟子を上首とするサンガ」に関する資料の考察から、以下の事柄が明らかになった。

第1には、「仏を上首とするサンガ」は一連の論文で追及してきたような、この地上に存在するすべての仏教の出家修行者を包含する組織的な、あるいは理念的な「釈尊のサンガ」をさすのではなく、釈尊がもつ特権としての「善来比丘具足戒」で出家させた釈尊の直弟子を中心とする、1,000人とか1,250人と表現される比丘たちから形成される、羯磨をなす律蔵のいう具体的な「サンガ」を指すということである。

第2には、「仏弟子を上首とするサンガ」は「仏を上首とするサンガ」と同列の、これまた羯磨をなす律蔵のいう具体的な「サンガ」であって、聖典には舍利弗・目連、大迦葉・阿難など特別の弟子たちを「上首とするサンガ」しか現れないが、現実にはインド各地に名もなき仏弟子たちを「上首とするサンガ」も存在したであろうということである。

そして別論文でさらに十分な論証をすることが必要であるが、これら「仏弟子を上首とするサンガ」は一般に考えられているように、決して民主的平等に運営されていたのではなく、「上首」となっているリーダーの強力な指導下にあって、それぞれがそれぞれの色をもっており、また決して構成員はそれほど流動的でもなかったということである。

このように「仏を上首とするサンガ」が「釈尊のサンガ」ではないということになると、今まで追及してきた「釈尊のサンガは存在したか」という問題に対する答えは、本論文によっても解決できなかったということになる。そこでこの問題に答えようとしたのが、次に掲載する【論文14】の「『釈尊のサンガ』論」である。

以上